日本遺産「古代日本の『西の都』」魅力発信事業

九州歴史資料館　令和６年度古代史研究フォーラム

筑紫君磐井（つくしのきみいわい）の乱の実像に迫る

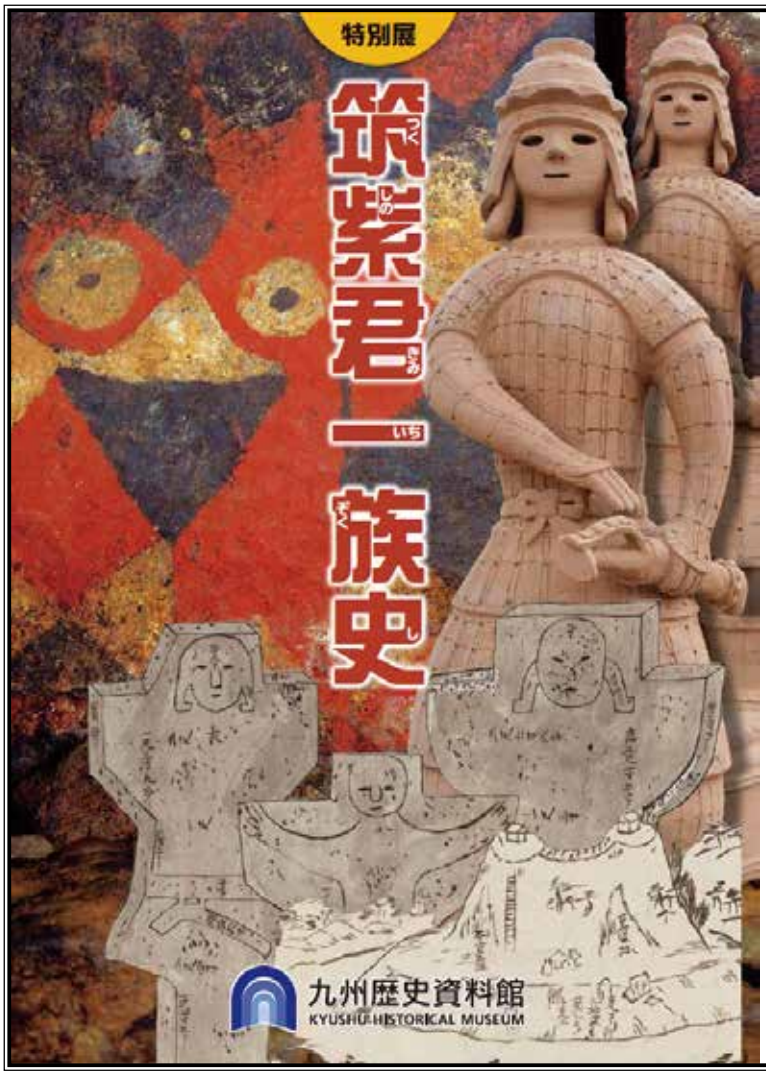
2024年（令和6年）

11月30日（土）

場　所　アクロス福岡イベントホール

主　催　九州歴史資料館 KYUSHU HISTORICAL MUSEUM

九歴HP　九歴X（旧Twitter）　九歴Instagram



会　場　九州歷史資料館 第１・２展示室

会　期　令和６年 10 月 12 日～ 12 月８日

観覧料　一般 210 円　高大生 150 円

※満 65 歳以上・中学生以下無料
※団体料金等、詳細は https://kyureki.jp/ をご参照ください。

特別展『筑紫君一族史』は、筑紫君の歴史から日本創成の風景を描く展覧会です。

国史に記された筑紫君は、ヤマト王権の主観を反映した姿であり、記事自体も簡略かつ虚実入り交じった内容です。筑紫君の実像に迫るには、筑紫君自らが築いた古墳や生活残滓となる集落跡等を複合した「遺跡」にも焦点を当てる必要があります。本展では、虚実ある文献史料の分析と物言わぬ考古資料の分析、双方の批判的統合を通じて、筑紫君一族の歴史を読み解いていきます。

九州歷史資料館 KYUSHU HISTORICAL MUSEUM

YouTube あたらしいこと、はじめました。

古代史研究チャンネル

「筑紫君磐井の乱の実像に迫る！」というタイトルで、筑紫君磐井と同時代を生きた豪族が眠る古墳について、古墳時代を専門とする研究者が解説し、「各豪族と磐井のかかわり」を通して、「乱の実像」に迫ります。

九州歷史資料館　学芸員（文献史）
酒井芳司

『筑紫君磐井の乱の実像に迫る！』

第１篇　御塚・権現塚古墳　（久留米市編）
第２編　王塚古墳　（桂川町編）
第３篇　月岡古墳・日岡古墳　（うきは市編）
第４編　今宿古墳群・東光寺剣塚古墳　（福岡地域編）
第５編　黒崎観世音塚古墳・石神山古墳　（南筑後篇）
第６編　須多田天降天神社古墳ほか　（宗像地域篇）
第７編　扇八幡古墳・甲塚方墳　（京都平野篇）

動画の視聴はこちら➡
検索方法は以下の２通り
①九州歷史資料館 HP
②Youtube から九州歷史資料館を検索！

ごあいさつ

福岡県立の歴史系博物館である九州歴史資料館が太宰府市の地に誕生し、その歩みを始めたのは昭和47年（1972）のことです。開館以来、古代最大の地方官衙である”大宰府”をはじめ、様々な調査研究に取り組んでまいりました。太宰府市で38年の歴史を刻んだ後、施設の拡充と機能強化をはかるべく、平成22年（2010）、小郡市へ移転しました。そして、移転後も調査研究をさらに深めるべく、その活動を継続し、現在に至っております。

近年における、新たな試みのひとつとして、古代史研究事業が挙げられます。この事業は、福岡を視座に据えた新たな歴史像の構築と、それによる日本の成り立ちの解明を目指しており、令和６年度までの研究テーマを古墳時代と設定しました。

令和４年には、その立ち上げとして「古墳が語る日本創成の風景」と題したフォーラムを開催し、総論的に福岡の古墳研究の現状をお伝えしました。今回は、研究の総まとめとして、かつて、八女地方に実在した”筑紫君磐井”に焦点をあて、彼とヤマト王権が激しく戦ったとされる”磐井の乱”の実像、さらには、乱が日本の古代国家形成に与えた多大な影響について、最新の研究成果を基に迫っていきます。

今回の企画をとおして、多くの方々が福岡県の古代史の魅力に触れ、関心を深めていただけることを、心より願っています。

最後になりましたが、本フォーラムに御登壇いただきました方々をはじめ、開催に御尽力いただきました関係諸機関、ならびに御参加・御支援いただきました皆様に深く感謝申し上げます。

令和６年11月30日

主催者

令和６年度古代史研究フォーラム

筑紫君磐井の乱の実像に迫る

プログラム

開会行事……(13：00～13：15)

基調講演……(13：15～14：05)
「筑紫君磐井の墓（岩戸山古墳）の石製表飾と装飾古墳の展開」
宮崎大学名誉教授　柳澤 一男

報告1……(14：05～14：30)
「筑紫君の古墳と開発」
九州歴史資料館　小嶋　篤

報告2……(14：30～14：55)
「筑紫国造とヤマト王権」
九州歴史資料館　酒井 芳司

トークセッション……(15：10～16：10)

コーディネーター　朝日新聞社　中村 俊介
九州歴史資料館　松川 博一

パネリスト　柳澤 一男、小嶋 篤、酒井 芳司
久留米市役所　小澤 太郎

閉会行事……(16：10～16：15)

登壇者紹介

講師・パネリスト

宮崎大学名誉教授　**柳澤　一男**

國學院大學文学部史学科卒。
福岡市教育委員会文化課、宮崎大学教育学部教授を経て、現在、同大学名誉教授。
横穴式石室・石製表飾・装飾壁画といった諸研究に取り組まれ、九州の古墳時代研究を牽引する第一人者。筑紫君の研究においても「有明首長連合」の提唱をはじめ、広域かつ通時的な視点から多くの論考を執筆されている。
著書に『描かれた黄泉の世界・王塚古墳』、『筑紫君磐井と「磐井の乱」岩戸山古墳』、『装飾古墳ガイドブック』（いずれも新泉社）など多数。

講師・パネリスト

九州歴史資料館
埋蔵文化財調査室
技術主査・学芸員
小嶋　　篤

福岡大学人文科学研究科史学専攻博士課程後期単位取得退学。博士（文学）。
九州歴史資料館技師、九州国立博物館研究員を経て現職。
著書に『大宰府の軍備に関する考古学的研究』（九州国立博物館）。編著に『大宰府学研究』・『大宰府史跡指定100年と研究の歩み』（九州国立博物館）。特別展「筑紫君一族史」（九州歴史資料館）、特別展「宗像・沖ノ島と大和朝廷」・特集展示「筑紫の神と仏」・「新羅王子が見た大宰府」（九州国立博物館）等を担当。

講師・パネリスト

九州歴史資料館
学芸調査室
参事補佐・学芸員
酒井 芳司

明治大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程中退。博士（史学）。
明治大学文学部助手、九州歴史資料館主任技師・学芸員、九州国立博物館主任研究員、九州歴史資料館企画主査・学芸員を経て現職。
著書に『大宰府の成立と古代豪族』同成社、2024年、分担執筆に舘野和己・出田和久編『日本古代の交通・交流・情報 I 制度と実態』吉川弘文館、2016年、森公章編『史跡で読む日本の歴史３古代国家の形成』吉川弘文館、2010年など。

コーディネーター

朝日新聞
編集委員
中村 俊介

早稲田大学教育学部地理歴史専修卒。
朝日新聞東京本社学芸部（現・文化部）、西部本社文化部編集委員などを経て現在、大阪本社文化部編集委員。
著書に『文化財報道と新聞記者』（吉川弘文館）、『世界遺産』（岩波新書）、『「文化財」から「世界遺産」へ』（雄山閣）、『遺跡でたどる邪馬台国論争』（同成社）、『古代学最前線』（海鳥社）など多数。

コーディネーター

九州歴史資料館
学芸調査室長
松川 博一

山口大学大学院人文科学研究科修士課程修了。
太宰府市文化ふれあい館、九州国立博物館、福岡県文化財保護課学芸員などを経て現職。
著書に『大宰府の政治と軍事』（同成社）、分担執筆に『古代史講義【戦乱篇】』（ちくま新書）、『筑紫と南島』（角川選書）など多数。

パネリスト

久留米市市民文化部
文化財保護課 主査
小澤 太郎

奈良大学文学部文化財学科卒業後、久留米大学大学院比較文化研究科前期博士課程修了。
現在、埋蔵文化財チームリーダー。
論文に「八女市童男山古墳群採集の石人について」（九州考古学67）、「岩戸山と今城塚－二つの前方後円墳における平面形態の比較試論」（史紋１）、「墳丘築造企画の継承－岩戸山と善蔵塚を例として」（地域の考古学）など。

基調講演

筑紫君磐井の墓（岩戸山古墳）の石製表飾と装飾古墳の展開

宮崎大学名誉教授　　柳澤 一男

はじめに

福岡県八女市吉田に所在する岩戸山古墳は、６世紀前葉につくられた墳丘長約132mの前方後円墳で北部九州最大の古墳である。これまでの発掘調査や採集された各種の石製品（石製表飾）などから、奈良時代の史書『古事記』や『日本書紀』に記されたヤマト王権に反旗をひるがえした筑紫君磐井の墓とされている。

岩戸山古墳が磐井墓とされる根拠は、鎌倉時代の儒学者であった卜部兼方が記した『釈日本紀』に記された『筑後国風土記』逸文の記事である。そこでは磐井が生前に自らの墓をつくったこと、その墓（古墳）には石人や石盾を交互に並び立てたことなどが記されている。また、江戸時代後期に久留米藩士であった矢野一貞が著述した『筑後将士軍談』（1863年、藩に献上）には、岩戸山の後円部上に伊勢社を建立する際に２体の扁平石人が採集されたことや、当時の岩戸山古墳に散在していた石製品の図化と墳丘の概略図を載せている。矢野はこうした石製品のほかに、岩戸山の所在地が「郡（奈良時代の郡役所）の南二里」という『筑後国風土記』逸文の記事に合致することから、岩戸山古墳を筑後君磐井の墓と想定した。

戦後には岩戸山古墳一帯が引揚者の開墾地となり、畑地化されるなかで岩戸山古墳から数多くの埴輪や石製品が採集された。その後、森貞次郎氏は墳丘の北東部周溝の外方ある方形壇を『筑後国風土記』逸文にいう「別区」とし、さらに墳丘規模も記事とほぼ一致すると指摘したうえで、筑紫君磐井墓は岩戸山古墳とする見解を示した（註１）。

本論では①北部九州のなかでの岩戸山古墳とその出現経過、②岩戸山古墳を特徴づける石製表飾、③磐井の乱後に急速に分布域を拡大した装飾古墳とその背景の３点について考えてみよう。

１．筑後の首長墓系譜と岩戸山古墳

（１）筑後の首長墓系譜

福岡県南部の筑後地方には、中央を東から西に流れる筑後川流域に広がる筑後平野の各地に前方後円墳や大型円墳の首長墓からなる首長墓群が点在している。なかでも筑後川南部では耳納山西麓の久留米市周辺、その南側広川南岸の八女市・広川町域、さらに矢部川以南の瀬高町・みやま市・大牟田市域に複数の首長墓群が認められる（図１）。なかでも広川の南岸には、広川町から八女市域に至る東西に７kmほど伸びる八女丘陵上とその南東側を流れる星野川北岸の山塊端部に首長墓群（八女グループ（前方後円墳11基、

図１　南筑後の首長墓分布図

大型円墳10基を含む））が展開し、岩戸山古墳はその中の一つである（図２）。

図２のように、八女グループの首長墓系譜は５世紀前葉の石人山（せきじんざん）古墳と６世紀前葉の岩戸山古墳とのあいだには顕著な大型墳が認められない。その間には久留米グループで５世紀前葉の藤山兜塚（ふじやまかぶとづか）古墳から後葉の浦山（うらやま）古墳まで大型前方後円墳が継続するが、５世紀末以降の首長墓は小型となる。６世紀代は前葉の岩戸山古墳、これに続く乗場（のりば）・鶴見山の２基の大型前方後円墳が続き、南筑後最大勢力を誇ったことが読みとれる。久留米グループ西よりの三潴群には５世紀後葉と岩戸山古墳を前後する時期に御塚（おんづか）・権現塚という二つの大型古墳の後、大型の前方後円墳がつくられたらしいが詳細不明である。現状で知られている前方後円墳や大型円墳からなる首長系譜を見る限り、筑紫君の勢力は八女グループ広川群の石人山古墳に始まるものの、その後、半世紀あまりは久留米群の首長系譜に主導権を移動しながらも、磐井の時期に改めて八女群の複数の中小首長からなる南筑後最有力の勢力として成長したと想定される。

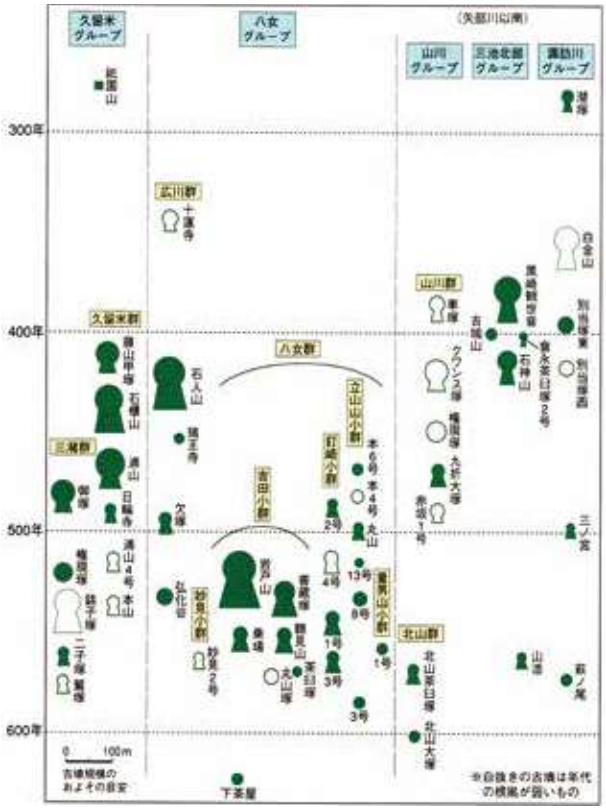


図２　南筑後の首長墓系譜

（２）岩戸山古墳の規模と構造

岩戸山古墳は東西に延びる標高50mほどの低丘陵上に位置する前方後円墳である。墳丘を東西に向け墳丘周囲を周堀と周堤がめぐり、後円部北東側の周堀外方に別区と呼ぶ方形の突出部がある。古墳の規模は1969・71年に福岡県教育委員会と九州大学によって行われた調査の結果、墳長約132m、後円部の直径約72m、前方部の前端幅約98m、墳丘は二段築成で後円部は高さ約13.5m、前方部の高さは約13mと確認された。葺石は上段斜面のみで下段には行われていない。周溝は後円部背面側で9.6m、前方部前面で12.3m、周堤は幅が13～14m、高さ約2.2～2.5mほどである（図３）。1946年の九州考古学会の調査では、後円部北側周堤上と前方部南側に円筒埴輪列の一部が確認されている。遺体を埋葬する埋葬施設は発見されていないが、1924年に行われた大神宮建設に伴って南側くびれ部附近の地下げ作業の際に、須恵器や土師器のほか石製品の一部が出土しており、そこが横穴式石室の入り口部に近い場所であった可能性が高い。岩戸山古墳の特徴として後円部北東側の周堤外側に、周囲

図３　図岩戸山古墳測量図

よりも１mほど高い一辺が43mあまりの方形壇があり、『筑後国風土記』逸文ではその場を衙頭＝政所と呼び、そこに各種の石製品を配置することで偸人の裁判の場を表現したと記している。

２．岩戸山古墳の石製表飾

（１）石製表飾とは

石製表飾とは「石人石馬」と呼ばれることもあるが、墳丘やその周辺に樹立・配置された盾・靫・甲冑・剣、人物や動物などの各種の器物をかたどった石製品の総称である。その分布はほぼ九州に限られ、福岡・熊本県の古墳からの出土がもっとも多く、大分・宮崎県でもわずかながら知られている（図４）。現在石製表飾が確認された古墳は27基、実物は現存しないが古記録のある古墳が２基、古墳が特定できない実物が４例ある。九州外では鳥取県米子市の石馬ヶ谷古墳一基のみである。九州の石製表飾に用いられた石材は熊本県天草市竹島３号墳の天草砂岩を除いて阿蘇溶結凝灰岩（通称阿蘇石）を使用し、鳥取県の石製表飾は角閃石凝灰岩である。

図４　石製表飾の分布

石製表飾の出現は５世紀を前後する頃にさかのぼり、その最古例は竹島３号墳の横穴式石室入り口前面に据えられた鏃形や、荒尾市別当塚東古墳の短甲形石製品（図５）である。５世紀前葉になると分布域を拡大し、大分県臼杵市臼塚古墳・福岡県荒尾市稲荷山古墳に短甲形の石製品が、やや遅れて福岡県みやま市石神山古墳や広川町石人山古墳などの大型前方後円墳に甲冑形（図６）が出現した。５世紀後葉になると、熊本県和水町江田船山古墳樹立品と想定される清原採集の石製品には

図５　出現期石製表飾（左･竹島３号墳、右･別当塚東古墳）

図６　甲冑形石製品（左・石人山古墳、右・石神山古墳）

甲冑形のほかに家形と椅子形、同じ菊池平野の小野崎では船形など形象埴輪を模したものや、佐賀県佐賀市西原（にしばる）古墳には笠形の支柱や石見型（いわみがた）と呼ばれる木製立物（もくせいたてもの）を模倣した石製品も登場する。５世紀後葉の江田船山古墳以後、石製表飾を樹立した古墳は激減し、岩戸山古墳とのあいだに確認された例は６世紀を前後する時期の荒尾市三ノ宮古墳の甲冑形１例にすぎない。

岩戸山古墳からは後述するように膨大かつ多種の石製表飾が発見されている。かつては岩戸山古墳ののち石製表飾は衰退したといわれたが、調査の進展によって現在では６世紀後葉までの10基の古墳例が確認され、福岡県北部や宮崎県北部へと広がりをみせている。

岩戸山古墳を除くと、石製表飾は１つの古墳に１点の例が多く、複数点の樹立例は限られている。注目される例に人物形・笠・靫・石見型などの石製品17点が出土した熊本県氷川町姫ノ城（ひめのじょう）古墳（墳長85mの前方後円墳）がある。この古墳は岩戸山古墳とほぼ同時期なので両者の関係は興味深い。

（２）岩戸山古墳の石製表飾

岩戸山古墳からはこれまで100点を超える石製表飾が出土・採集され、そのほとんどが岩戸山古墳に隣接する八女市立岩戸山歴史文化交流館「いわいの郷」に展示されている。

石製表飾の大部分は墳丘周辺の開拓や削平のさいに採集されたものと思われる。出土場所が確認されるものには江戸時代の末頃に後円部上に伊勢社設置時に出土したとされる２つの靫形（背面に人物表現）や、1924年の大神宮社殿建設時に掘削された南くびれ部から見つかった馬形の脚部？と盾形らしい石製品が写真に残るほか、1991年の台風によって北側くびれ部附近の倒れた木の根の周辺から石見型の石製品が採集されている。正確な調査例としては、1969年に行われた別区の調査により発掘された小型の人物形と壺形石製品の破片がある。また、1963年の大雨による前方部墳頂部の樹木倒壊に伴う緊急調査では、円筒埴輪列に沿って剣形４点と靫２点の石製品の破片が検出されており（註２）、その出土状況は『筑

図７　岩戸山古墳の石製表飾

図８　レガリア形石製表飾（左･広帯二山形冠形、右･振り環頭大刀形）

後国風土記』逸文の記述を彷彿とさせる。改めて岩戸山古墳から採集された石製表飾をみると、その数とともに種類の多さに圧倒される（図７）。種類別では人物・武器・武具・動物などの形象埴輪をモデルとしたもののほかに木製立物をモデルとしたもの、レガリア（宝物）の一部を模したものなどがあり、その大半は他に例のない独自のものである。まず手足表現のある「石人」と称される本格的な人物形には、大型の武人・文人や力士・女性や裸体のほかに小型の製品ある。なかでも、冑を被った人物像は復元すると高さが２ｍを超えるサイズとなる超大型品で、『筑後国風土記』逸文にいう「衙頭にゆったりと立つ人がいる。名付けて解部（ときべ）という」石製品に該当するかもしれない。動物形には馬・鶏・猪？が、武器・武具形には剣や多様かつ特異な表現の盾と靫がある。また壺を模したと容器形もある。レガリア形は、振り環頭大刀（もじかんとうたち）の一部や広帯二山式冠（ひろおびにざんしき）を装飾する蝶形（ちょうがた）金具を象った特殊なもの（図８）で、その実物は継体王権を象徴する威信財といわれている（註３）。あえてこのような石製品を製作したのは、古墳被葬者の筑紫君磐井が継体王権との親密な関係をアピールしようとしたのではあるまいか。

こうした多種の石製表飾が墳丘上や別区に配置されているが、形象埴輪は別区周辺から採集され人物形・馬形・鶏形などが出土したに過ぎない。石製表飾は同形の形象埴輪よりも大形につくられており、そこに石製品の優位性を示そうとする製作意図があったのかもしれない。

それでは石製品の製作にはどのような人たちが関わったのであろうか。想定されるのは、阿蘇石を加工して石棺を製作する石工（いしく）集団である。彼らは阿蘇石が採掘される場所を勢力下におさめる有力首長層のもとに組織されたのであろう。例えば広川町石人山古墳とみやま市石神山（せきじんさん）古墳の甲冑形は形態上の類似性から、阿蘇石産出地に隣接する三池北部グループの首長勢力に属する石工集団によって製作された製品が石人山古墳まで運ばれたと思われる。それでは膨大な数の石製表飾が用いられた岩戸山古墳の場合はどうだろうか。岩戸山古墳段階では阿蘇石製石棺は馬門ピンク石をつくった熊本県南部の宇土市周辺に限られているが、石室や石屋形の石材としての阿蘇石が菊池川流域や熊本平野北部一帯で使用されており、そうした地域から派遣された石工集団が岩戸山古墳の近くで共同製作にあたったのではなかろうか。

３．北部九州における装飾古墳の展開と筑紫君磐井

（１）装飾古墳とは

装飾古墳は遺体埋葬施設である石棺の内外面や、石室・横穴墓の壁面に各種の図文を彫刻や彩色で表現した特殊なもので、これまで全国で約650基が知られている、そのうちの約60％を九州で占め、なかでも熊本県域は約190基、福岡県域約80基と突出している。

日本における装飾古墳の出現は4.世紀中葉頃、北陸・近畿地方の刳抜式石棺の蓋や身の外面に円

文や直弧文と呼ばれる特異な図文を彫刻手法で表現することに始まる。九州ではやや遅れて５世紀を前後する頃に熊本県南部の八代海沿岸域で箱形石棺や横穴式石室の石障に彫刻手法の円文表現が出現し、５世紀代には広く熊本県域に展開した。５世紀前葉には王権に特有の直弧文が熊本県南部域に導入され、５世紀後葉にかけて福岡・熊本県域の有力首長墓（前方後円墳や大型円墳）に輸送された石棺に表現されている。初期の装飾表現は線刻や陰刻などの彫刻技法に限られていたが、５世紀中葉の熊本県宇城市鴨籠古墳の石棺蓋に線刻された直弧文は赤と青の２色の顔料で塗り分けられていたらしく、佐賀市西原古墳の石棺には赤のほかに緑の顔料が認められている。それ以降、各種の顔料による図文の塗り分けが多くなった。６世紀前半以降になると熊本県域では横穴墓への図文装飾が急増するほか、福岡・佐賀・大分県域へと装飾古墳が一気に拡散するが、その背景には磐井の乱後の肥後北部勢力の拡大があったと想定されている（註４）。

そうした拡散の契機となった装飾古墳として６世紀前葉につくられた福岡県うきは市の日岡古墳と桂川町の王塚古墳があるが、日岡古墳がわずかに先行するようである。以下、図文装飾の具体的内容と筑紫君磐井との関係について検討したい。

（２）日岡古墳の横穴式石室と壁画（図９）

日岡古墳は筑後川中流域の左岸低台地上につくられた墳長74mの前方後円墳で、近接する月岡古墳（５世紀中葉）、塚堂古墳（５世紀後葉）に続く６世紀前葉の有力首長墓である（註５）。

1888年（明治21）に坪井正五郎氏によって発掘され、石室の壁面に描かれた彩色壁画が発見された。後円部につくられた横穴式石室は玄室上部が崩壊し天井石が落下しているが、羨道部は天井部まで完存する。玄室平面形は胴張り形の長方形で、長さ４m、奥壁幅2.1m、最大幅2.8m、幅0.9mで、前壁中央に長さ1.2m、幅0.9m、高さ1.4mの短小な羨道が接続する。玄室周壁は扁平な割石を積みあげるが、奥壁の下段には高さ1.5mの大型石材（鏡石）を立て、その上方に石棚を設置している。玄室の現存高は約２mほどである（現在は遺存壁体上に１mほどの石積みが施されている）。石室内の壁画は赤・白・緑・灰の４色の顔料で、玄室および羨道の

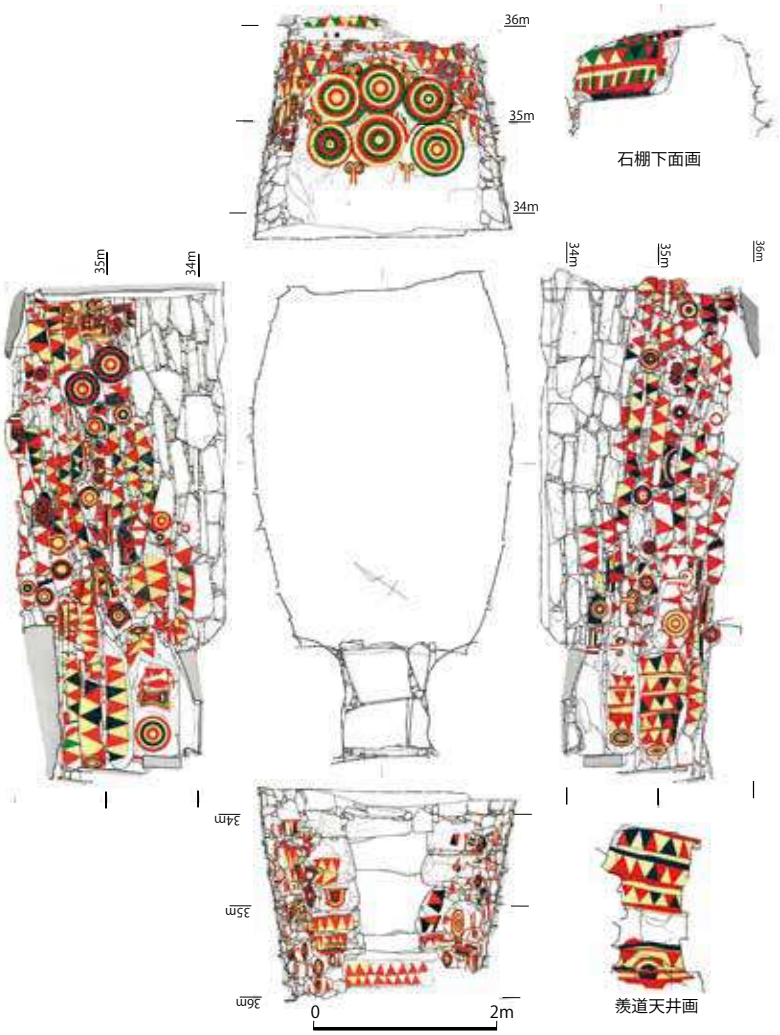


図９　日岡古墳横穴式石室と壁画

図10　天井壁画の連鎖

壁面全体に各種の図文が描かれている（図９）。玄室はともかく、羨道の壁や天井までに描く手法は全国を見ても他に例がない。崩落した玄室上部や天井石に壁画が描かれたかは不明だが、全面に描かれていた可能性が高い。一方、玄室の奥壁とその前面2.4ｍほどの両側壁の下部は、床面から0.5mほどのあいだに図文表現が見られないことから、石屋形（いしやがた）と側壁に沿う石障状の板石が設置されていた可能性がある。

彩色壁画最大の特徴は、玄室奥壁の鏡石に描かれた直径50～70cm弱で五ないし六重に白・赤・緑・灰色の４色を重ねた大型同心円文３個を２段に重ねた表現で、その周囲を連続三角文や蕨手文で埋める。側壁は壁体の割石に三角文や連続三角文、直線文などで埋め、円文や同心円文、蕨手文を点在的に描き、その間に盾･靫･太刀･船･馬・魚などの具象文を描くが、太刀・船・馬・魚の図文はわずかに1個のみ、盾と靫は２個のみである。これらの具象文は彩色表現としては最古例である。奥壁に設けられた石棚には前面と下面に図文表現がある。前面は連続三角文を、下面は直線文で区画した細長面に連続三角文を描く。

羨道部の壁画は、側壁と天井石に彩色による図文が描かれている。側壁は左右ともに上部に連続三角文、左壁下部には同心円文と盾、右壁下部には同心円文を描く。一石の大型石材で構成された天井石には、玄室側を直線文で区画した内部に連続三角文を、入り口部側は複数の直線文と不規則な図文を描いている。先述したように羨道部壁面への図文装飾は国内で唯一の例で、天井部へ図文装飾は他に熊本市釜尾（かまお）古墳があるにすぎない。

ところが、2000年に行われた韓国慶尚南道固城（コソン）市の松鶴洞（ソンハクドン）古墳群の調査で、1Ｂ号墳１号石室の玄室天井部から釜尾古墳と日岡古墳の羨道天井石壁画をミックスしたような図文が認められた。調査報告では壁画とされていないが、鮮明なカラー図版から壁画と見て間違いない（図10）（註６）。

（３）王塚古墳の横穴式石室と壁画

福岡県北部の筑豊地域に位置する王塚古墳は、遠賀川の支流である穂波川に近接する墳長約86mの前方後円墳である。墳丘は土取りなどによって破壊されたところが多いが、発掘調査の結果２段築成で上段側面にのみ葺石が施されていることが確認されている（岩戸山古墳も同様の墳丘構造）。壁画が描かれた横穴式石室はくびれ部に近い後円部に位置する。この古墳の壁画が見つかったのは1934年（昭和９）９月、壁画に対する本格的な調査は1936～38年にわたって京都帝国大学考古学教室によって行われ、1940年に刊行された報告書には高精度の壁画実測図が当時としては珍しいカラー図版（図11）として掲載された（註７）。

この横穴式石室は、長方形の玄室に幅広の羨道を接続する構造で、玄室は長さ4.2m、幅３ｍ、高さ3.6m、玄門は幅広の立柱石を袖石とする。羨道は幅2.7m、高さ1.6～2mと幅広で玄門から2.6mのところで扁平な割石を積み上げて閉塞されている。石室の構造は、玄室の奥壁と左右の側壁下部を巨大石材で腰石とし、玄門にも大形の立柱石を使用する。左右の立柱石上には梁状の楣石（まぐさいし）を架構し、その上に１つの塊石を挟んで大形の冠石（かんせき）を配置して小窓状の空間を構成している。奥壁腰石上には

塊石１段の上部に石棚を設ける。側壁腰石と玄門冠石の上部には比較的大ぶりの塊石を内傾しながら積みあげて巨大な天井石で覆う。玄室内部は複雑な構成で、奥壁に沿って石屋形と呼ぶ遺体安置施設がある。その床には２体の遺体を安置する窪みを掘りこんだ特異な屍床石（ししょうせき）を置き、その左右の側石上に蓋石を架ける。屍床石は遺体安置部分の前面に幅広の段を設けその側面に側石を置く。さらにその前面の左右には上面にあたかも灯明皿を掘り込んだような形状に加工された灯明台石を立てている。これらの石屋形とそれに附属する特異な形状の石製品は阿蘇石を加工したもので、その形状から熊本県北部の菊池川流域附近（玉名市・和水町・山鹿市）で製作された部材が搬入されたものと推測される。また、その前方には遺体の頭部安置用の石枕（いしまくら）二個が配置されている。

王塚古墳の壁画装飾の特徴は、羨道部では側壁を除く玄門前面と玄室のすべての壁面に図文が描かれ、図文が描かれない部分には赤色顔料が塗布されている点にある。使用された顔料は赤・黒・白・黄・緑・灰の６種、図文の種類は、幾何学文に同心円文・単独三角文・連続三角文・小型円文（珠文（しゅもん））、抽象文に蕨手文・双脚輪状文（そうきゃくりんじょうもん）、具象文に盾・靫・太刀・船・騎馬人物がある。装飾図文は日岡古墳の図文に珠文・双脚輪状文・騎馬人物が加わったにすぎないが、表現方法の複雑さと多様さにおいて格段の違いがある。また、玄室上部の巨大な天井石には赤色顔料の上に黄色で珠文群が描かれている（図11）。

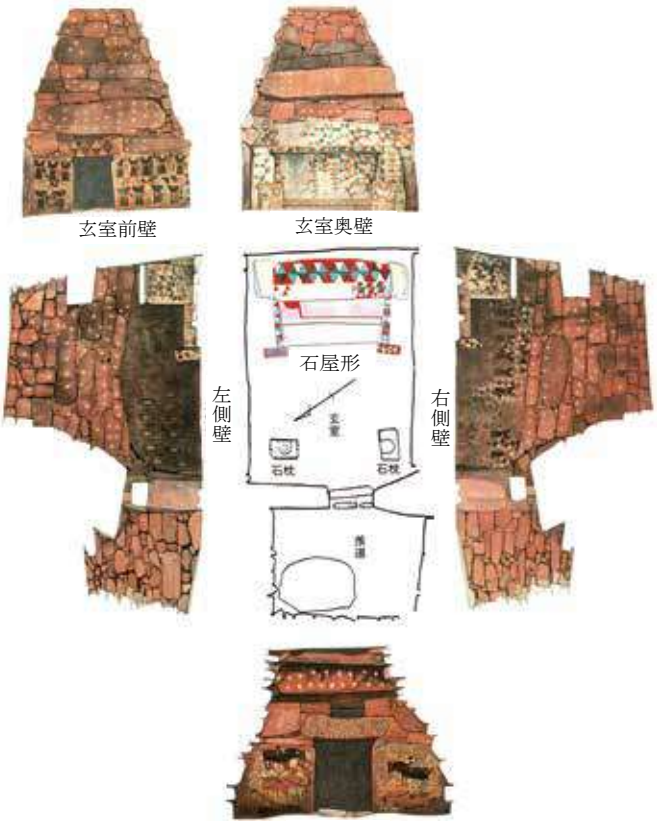


図11　王塚古墳横穴式石室と壁画

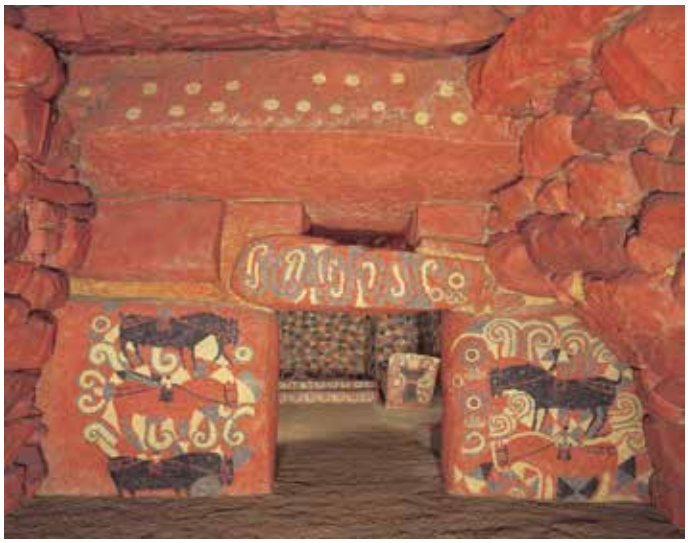
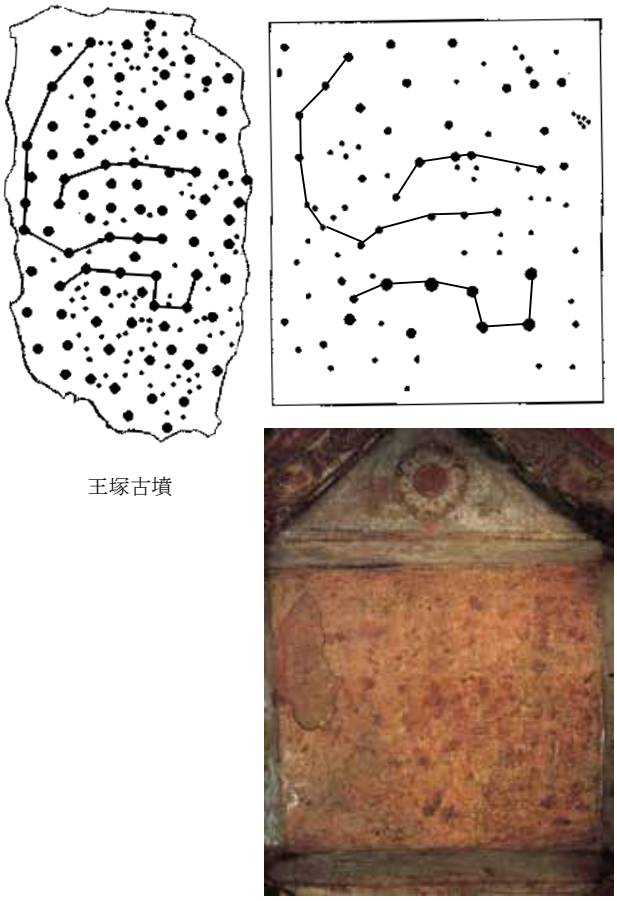


図12　玄門前面の壁画（国立歴史民俗博物館レプリカ）

以下、複雑多様な壁画の内容を要約しておこう。まず驚かされるのは玄室の入口にあたる左右の袖石やその上部の楣石・冠石に描かれた図文である（図12）。まず袖石の主たる図文は、左側が上・中・下に３体、右側壁が上・下に２体の騎馬人物像が向かい合うように描かれ、それを取り巻くように描かれた同心円文や多様な蕨手文・双脚輪状文・三角文で埋め尽くされている。馬は赤と黒に塗り分けられ、馬の鞍上に小形の人物が描かれ手綱はしっかり表現されている。楣石には上下に延びる変形した蕨手文が並列に表現され、右端



王塚古墳

真坡里４号墳

図13　天井石の聖縮図

に双脚輪状文が添えられている。最上段の冠石前面には、黄色の珠文が２段に描かれている。

玄門をくぐると、奥壁と左右側壁の巨大な腰石は縦位の連続三角文と盾や靫などの図文で、前壁側の袖石は盾や大刀と三角文で埋め尽くされている。右側壁の腰石は靫が２段に並び、上段の９個の靫のうち、右から２番目の靫の上には小型の船が描かれ、４番目の靫には上から右側をめぐるように白色の珠文が大小６個認められる。一方左側壁の腰石は、縦位の連続三角文のあいだに盾の図文が３段に描かれている。奥壁の腰石は下部に５個の靫が並び周囲を縦位の連続三角文で埋める。石屋形は側石前面と内面、蓋石前面と上面を連続三角文、屍床石の段と障石の多様な蕨手文や三角文で充填されている。石屋形前面の灯明台石上面と前面にも丁寧な図文が認められる。

最後に玄室天井石に描かれた珠文群に触れよう。この壁画は日下八光（くさかはっこう）氏による模写作業で確認された図文で、天文学者の平井正則氏によってこの図文が高句麗墳墓の真坡里（チンパリ）４号墳の天井壁画と酷似する星宿図（せいしゅくず）であることが明らかにされた（図13）（註８）。

（４）日岡・王塚古墳の壁画と朝鮮半島

日岡古墳と王塚古墳の横穴式石室はそれまでの北部九州型から新たに誕生した石室型式でありながら玄室奥壁に石棚設置という紀伊地方で誕生した施設を取り入れた。また、それまでの壁画が横穴式石室の石障や石屋形など限定的に表現する手法とはまったく異なり、図文も新たな具象文や抽象文を生み出した。なかでも石室の壁面全体に図文を描く手法は高句麗の壁画古墳と共通しており、二つの古墳壁画の制作にあたって相互の絵師集団と交流があった可能性が高い。

それでは、先述した日岡古墳の羨道天井に描かれた壁画と韓国の松鶴洞１Ｂ号墳１号石室の玄室天井壁画との関係はあるのであろうか。１Ｂ号墳の１号石室は、北部九州型の玄室に肥後系の羨道を接続した長鼓峰（チャンコボン）式と呼ぶ倭系の横穴式石室である（註９）。このような横穴式石室の構築には、九州中北部から造墓集団が派遣される必要があり、そのなかに日岡古墳の壁画に関与した集団が含まれていた可能性がある。ちなみに松鶴洞古墳群は小加耶（ソガヤ）の王陵群と推測され、最近、加耶最大規模の松鶴洞14号墳（径・約50m前後、高さ7.6m）が発掘され、大型の竪穴式石槨から倭製の三角板短甲や多くの鉄製武器が出土し王墓の形成が５世紀中葉にさかのぼるという報道があった。

一方、王塚古墳の玄室天井石の図文は、高句麗墓の真坡里４号墳玄室天井画の星宿図に由来するが、祖型となる真坡里４号墳（径約23m、石室床面からの現墳丘高4.1m）は６世紀を前後する時期の築造と推測されている（註10）。真坡里４号墳は北朝鮮平壌市に所在し、高句麗の広開土王を継いだ

長寿王（491年没）墓から約300mと隣接し、王権のなかでも重要な位置にあった人物の墓と推測される（註11）。王塚の玄室天井画を描くには、真坡里４号墳星宿図の粉本（下絵）を入手しただけではなく、渡来した高句麗系絵師の存在が想定される。

以上のように、日岡・王塚古墳にみられる朝鮮半島諸勢力とのつながりは。当然のことながら何らかの外交関係があったことを物語る。奇しくも６世紀を前後して、朝鮮半島南西部の全羅南道とその周辺に前方後円墳や倭系横穴式石室が集中して築造されている。これまで前方後円墳は16基ほどが見つかっているが、発掘された前方後円墳の埋葬施設のほとんどは中北部九州系の倭系横穴式石室である。その時期はほぼ筑紫君磐井の活動期間と重なり、その外交に中北部九州の諸勢力が関与したと思われる、日岡古墳の被葬者勢力は加耶西端の小加耶勢力と、岩戸山古墳の被葬者勢力は高句麗王権の周辺と接触したと想定されるが、筑紫君磐井勢力の一員として行なわれたものであろう。磐井の乱後には前方後円墳の築造は停止しており、磐井を頂点とする中北部九州勢力と朝鮮半島勢力との直接的な外交は終えたと考えられる。それは、地方勢力による朝鮮半島との独自外交を遮断し、ヤマト王権による外交権の掌握・統一化を目指した結果であろう。

４．おわりに

以上、南筑後の首長墓系譜の推移、岩戸山古墳の規模や構造と据えられた石製表飾を通じて、筑紫君の成長過程や磐井墓の類い希な特質を見てきた。また岩戸山古墳とほぼ同時期につくられた特異な２基の装飾古墳を通じて、筑紫君磐井を頂点とする中北部勢力が朝鮮半島諸地域と積極的な外交を行っていたことを提示した。磐井の乱の要因について『古事記』や『日本書紀』の記事は、磐井の無礼や新羅からの賄賂をもらっての王権への反逆と記されているが、近年の朝鮮半島の古墳調査と研究の進展によって、磐井勢力を含めて九州中北部勢力による朝鮮半島諸地域との積極的な外交の実態が判明しつつあり、それらの研究の進展を通じて継体王権とその後の古代国家形成の歩みを考えることが重要と思う。

註１　森貞次郎1956「筑後国風土記逸文にみえる筑紫君磐井の墳墓について」『考古学雑誌』41巻3号
註２　波多野晥三・小田富士雄1964「筑後・岩戸山古墳新発見の埴輪列、石製品の調査」『九州考古学』20･21
註３　高松雅文2010「継体大王の時代を読み解く」『継体大王の時代』大阪府立近つ飛鳥博物館
註４　吉村靖徳2024「筑後における彩色壁画古墳の出現と磐井の乱」『九州歴史資料館研究紀要』49
註５　吉井町教育委員会編1989『若宮古墳群Ⅰ』吉井町文化財調査報告書４
註６　東亜大学校博物館編2005『固城松鶴洞古墳群１号墳発掘調査報告書』古跡調査報告第37冊
註７　京都帝国大学文学部考古学研究室編1940『筑前国嘉穂郡王塚装飾古墳』京都帝国大学文学部研究報告15
註８　平尾正則2003「古墳天井画の数値的同定」『福岡教育大学紀要』第52巻第３分冊
註９　柳沢一男2001「全南地方の栄山江型横穴式石室の系譜と前方後円墳」『朝鮮学報』17集
註10　朱栄権（永島暉臣愼訳）1972『高句麗の壁画古墳』学生社
註11　金日成総合大学編（呂南喆・金洪圭訳）1985『五世紀の高句麗文化』雄山閣出版

報告１

筑紫君の古墳と開発

九州歴史資料館　小嶋　篤

１．筑紫君と周辺諸豪族の墓域

八女古墳群の墓域構成　筑紫君の墓域比定として有力な学術的根拠があるのは、『筑後国風土記』で「筑紫国造磐井墓」として記述される岩戸山古墳である（森1956）。この岩戸山古墳を中心に、同じ八女丘陵上に存在する墓域を「八女古墳群」として総称する。しかし、八女丘陵は東西約12kmにもおよぶ長大な丘陵であり、すべての墓域を無批判に筑紫君と直結して理解することはできない。八女古墳群の大半は未調査であるが、現段階の調査状況（主体部構造・墳丘表飾）を総合すると、墓域は①広川群・②吉田群・③宅間田群・④豊福川群・⑤山内群の五群に大別でき、各群は造営期間や古墳規模等を違える（図１）。

岩戸山古墳築造以前の八女古墳群　八女古墳群で最も古い大型墳が分布するのは、丘陵西端部（有明海側）の広川群である。墳長約116m の石人山古墳は、被葬者を特定できる文字史料は残されていないが、「八女古墳群に属する大型前方後円墳であること」、「有明海沿岸域で共有される石製表飾・横口式石棺をもつこと」等から、筑紫君磐井よりも二世代ほど前（５世紀前半）の筑紫君の族長墓とみなされてきた。広川群の造営集団は墓域の占地状況から、広川水系および八女丘陵先端の開析谷を本拠地としていたことが見込まれる。

古墳時代前期（４世紀）に墓域形成がはじまる豊福川群は、丘陵東端部（筑肥山地側）に分布する。古式群集墳を内包しており、面的調査がなされた立山山古墳群では、４～６世紀という200年以上におよぶ造墓活動が認められる。立山山古墳群と石室構造（中高式天井の北部九州型石室）を共有する本６号墳は、直径約35メートルの円墳であり、豊福川群の首長墓に位置づけられる。また、豊福川群の造営集団は墓域の占地状況から、矢部川水系（福島低地）を本拠地としていたと判断できる。

以上のように、岩戸山古墳築造以前（５世紀以前）の八女古墳群は、広川群と豊福川群という東西二つの墓域が並立し、各墓域の造営集団は本拠地となる水系・生活圏も違えていたと判断できる。

八女古墳群北方の墓域　八女古墳群北方の「藤山」周辺首長墓の石櫃山古墳・浦山古墳は、石人山古墳と同じ主体部構造をもち、北部九州型横穴式石室内部に横口式石棺を納めることから、広川群と一体的な関係にあったと想定されている（柳沢2014）。また、埴輪の製作技術・焼成状況も石人山古墳と石櫃山古墳は酷似しており、造墓動員の重複が有力視できる。「藤山」は『日本書紀』において、「水沼県主猿大海」が女神・八女津媛の存在を景行天皇に奏上した地であり、同地の墓域造営者には筑紫君だけでなく、水沼県主（水沼君・水沼別）も候補に挙がる。ただし、５世紀後半～６世紀前半における水沼君の墓域としては、広川最下流域（久留米市大善寺町・三潴町周辺）の御塚・権現塚古墳が最有力候補である。九州西部における墳丘表飾の巨大化は、5世紀後半の御塚古墳からはじまり、岩戸山古墳・中ノ城古墳へと発展する。本展開では埴輪製作技術は不連続で、「巨大化」という要素のみが共通することから、豪族間の共通理解・対抗意識が反映されたと見た方がよい（図２）。いずれにせよ、5世紀後半の有明海沿岸域では、御塚古墳（墳丘72m）が最大規模の古墳であり、当該期の八女古墳群は墳丘規模･表飾ともに小型化する。造墓動員力を重視すれば、

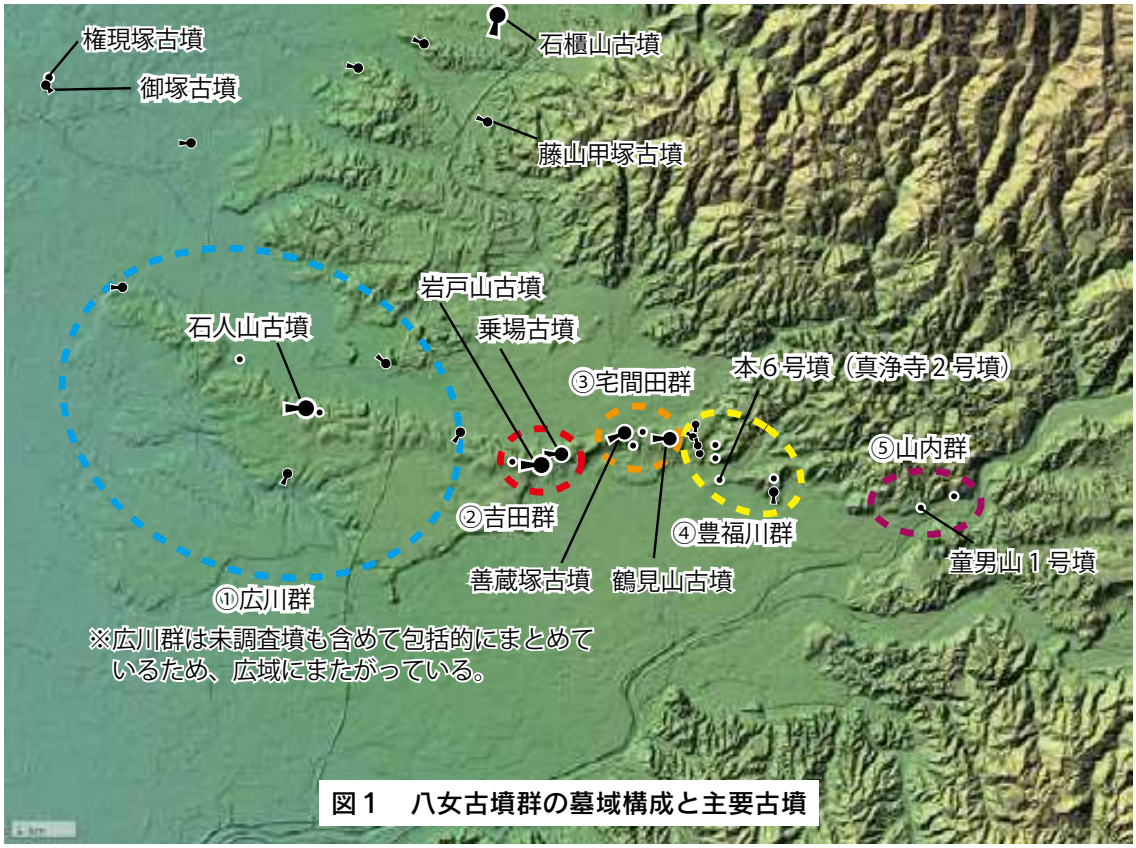


図１　八女古墳群の墓域構成と主要古墳

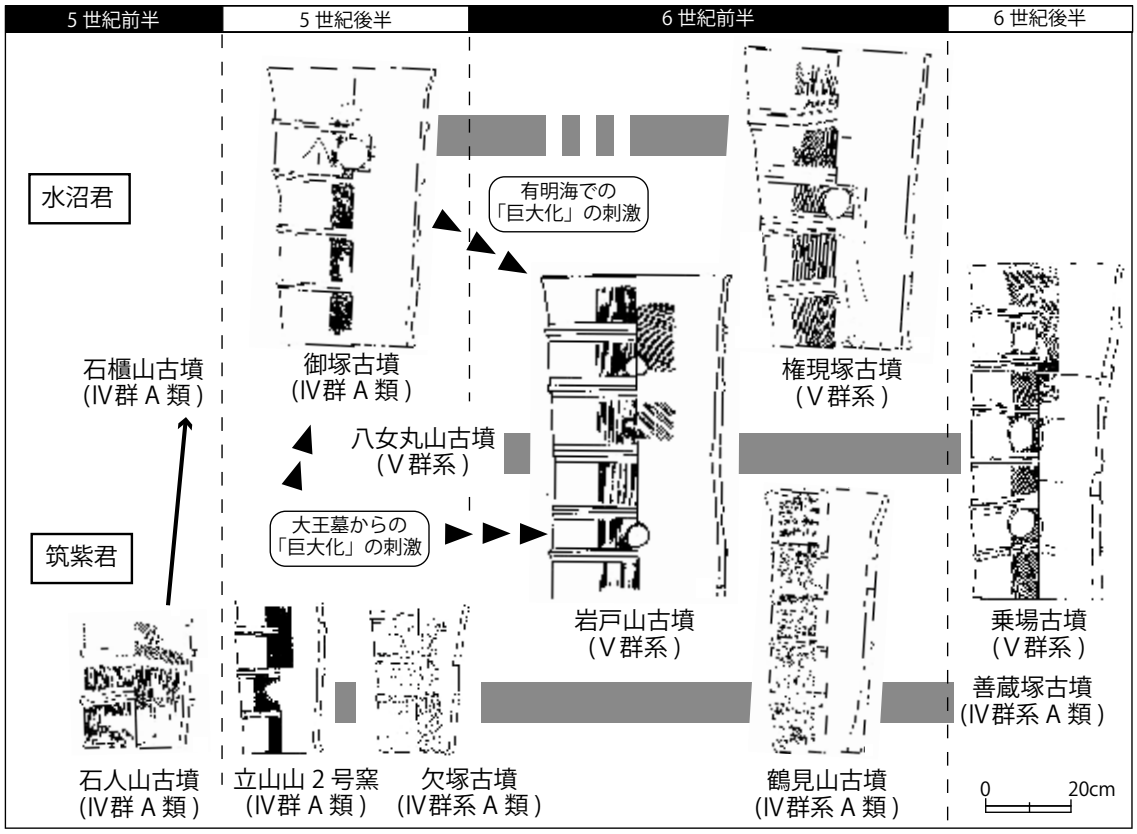


図２　有明海沿岸域における墳丘表飾「巨大化」の様相

当該期の有明海沿岸域では水沼君が台頭していたと捉えるのが穏当である。加えて注目できるのが、『日本書紀』雄略天皇十年「水間君による鴻十羽・養鳥人の献上（贖罪）」記事であり、台頭した水沼君もヤマト王権（雄略天皇）に臣従（屈服）していたことを象徴する。

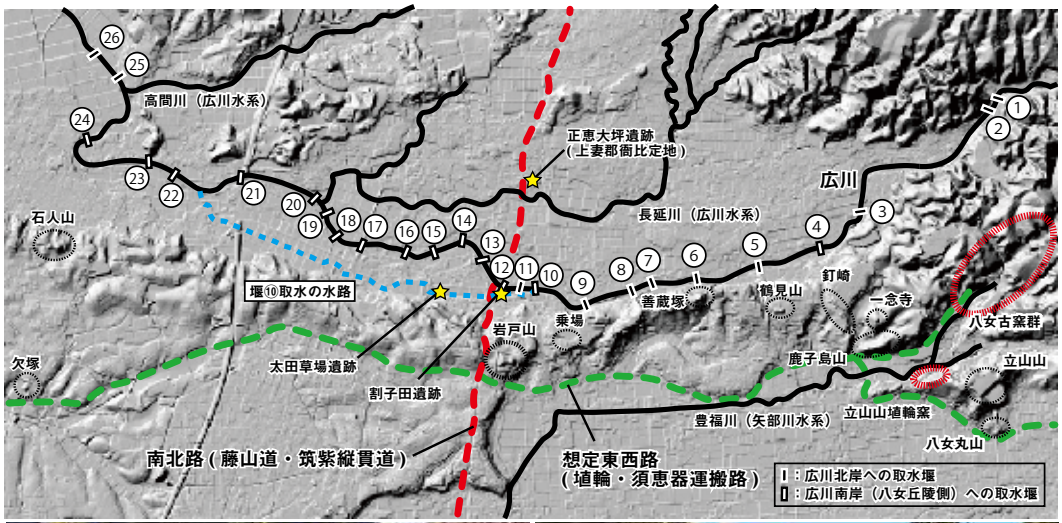
筑紫と火の結合　『日本書紀』によると、筑紫君と火君間には婚姻関係が結ばれており、双方の氏族名を継承する「筑紫火君（筑紫君の子、火中君の弟）」の存在が記されている。加えて、『筑後国風土記』では、筑紫神の奉斎は筑紫君・火君等によりなされており、奉斎神も重複関係にあることが分かる。「筑紫君磐井の乱」においては、火君の参戦自体は明記されていないが、乱の対象範囲が「筑紫・火・豊」と記されており、火君を構成する氏族（火中君等）の一部は磐井に呼応した可能性が高い。

上記の文字史料を検証する代表的考古資料が「石製表飾（石人石馬）」・「石棺」であるが、これらに加えて注目できるのが、古墳築造の一環でなされた埴輪生産である。埴輪は一つの古墳に百個体・千個体単位で設置されるため、調査が進んでいない古墳でも研究素材を蓄積できる利点を有する。この埴輪に着目すると、八女古墳群の埴輪には最下段突帯を板状工具で押しつける「押圧技法」が高頻度で確認できる。「押圧技法」の分布は、北は筑後川下流域（佐賀県鳥栖市）、南は菊地川中流域（熊本県山鹿市・和水町）に広がり、筑紫・火間での古墳築造動員の重なりが見出せる（図４）。本分布域は５世紀後半～６世紀前半に形成された。

２．筑紫君磐井の古墳築造と開発

磐井の権力基盤と生活基盤　岩戸山古墳は広川群と豊福川群の中間、八女丘陵中央部の吉田群に属する（図１）。八女丘陵は広川水系と矢部川水系を隔てる分水帯であり、その中央部に営まれた岩戸山古墳は広川低地と福島低地の双方を見下ろす巨大建造物であった。この巨大建造物の築造には、石人山古墳・御塚古墳等を上回る造墓動員がなされていることは確実である。造墓動員を実証的に示すのが岩戸山古墳に設置された埴輪であり、豊福川群内で操業された立山山埴輪窯から供給された。また、岩戸山古墳の埴輪は豊福川群の首長墓・八女丸山古墳（６世紀初頭）の埴輪と同一系統（Ｖ群系）に属する（図２）。これらの点を論拠とすると、筑紫君磐井の旗下に豊福川群の造営集団が存在することは確実である。巨大埴輪を運搬する八女丘陵裾の東西路も整備され、吉田群と豊福川群を物理的に連結した（図３）。

次に広川群と岩戸山古墳の関係を検討する。岩戸山古墳の眼下は広川本流が八女丘陵に阻まれて、流れを北向きに変える転換点に位置する。したがって、川下にあたる広川群に向けて灌漑水路を整備する場合、岩戸山古墳眼下に取水堰を設けるのが最適解である。実際に岩戸山古墳北方の割子田遺跡で、広川本流から取水した古墳時代後期～飛鳥時代の灌漑水路（TK10型式期以前の掘削）が検出されている（図３）。同水路の延伸部は太田草場遺跡等でも検出されており、同地点の水路幅は約５ｍにも達する。丘陵裾に沿った水路は、現代水路とほぼ重複関係にあり、筑紫君が高度な灌漑機構を広域に整備していたことを実証する。古墳時代において、水利権の利害調整は豪族の責務



堰⑩　岩戸山・乗場古墳眼下の取水堰

広川が八女丘陵段丘に遮られ、低地中央部へと流れを変える下流地点。広川低地西側（八女丘陵側）を潤す灌漑用水路 (堰⑩取水水路) の重要起点である。

堰⑥　善蔵塚古墳眼下の取水堰

堰⑤～⑨間は広川が八女丘陵裾と接触し、自然地形由来の直線化が見られる。階段状に堰を設けて、広川低地南側（広川沿い）の灌漑用水を確保する。

堰⑩付近から取水する古墳時代後期～飛鳥時代の水路（割子田遺跡）

現代水路とほぼ重複関係にある古墳時代後期の水路 (6 世紀前半・TK10 型式期以前掘削) で、延伸部分が太田草場遺跡で検出されている。八女丘陵裾を巡らせることで、灌漑面積の拡大を図る。部分的な掘り直し (大溝 2→大溝 1) も経ながら、100 年以上維持されていたが、筑紫国造軍も動員された百済救援戦争 (661 ～ 663 年) 頃に埋没する。

図３　岩戸山古墳築造と連結する生活基盤の拡充

であり、灌漑機構の広域整備により筑紫君主導の集団統合がさらに進展したことを想起させる。つまり、岩戸山古墳眼下の取水堰を起点とした灌漑機構を論拠とすると、少なくとも広川群東部は筑紫君旗下にあったと判断できる。

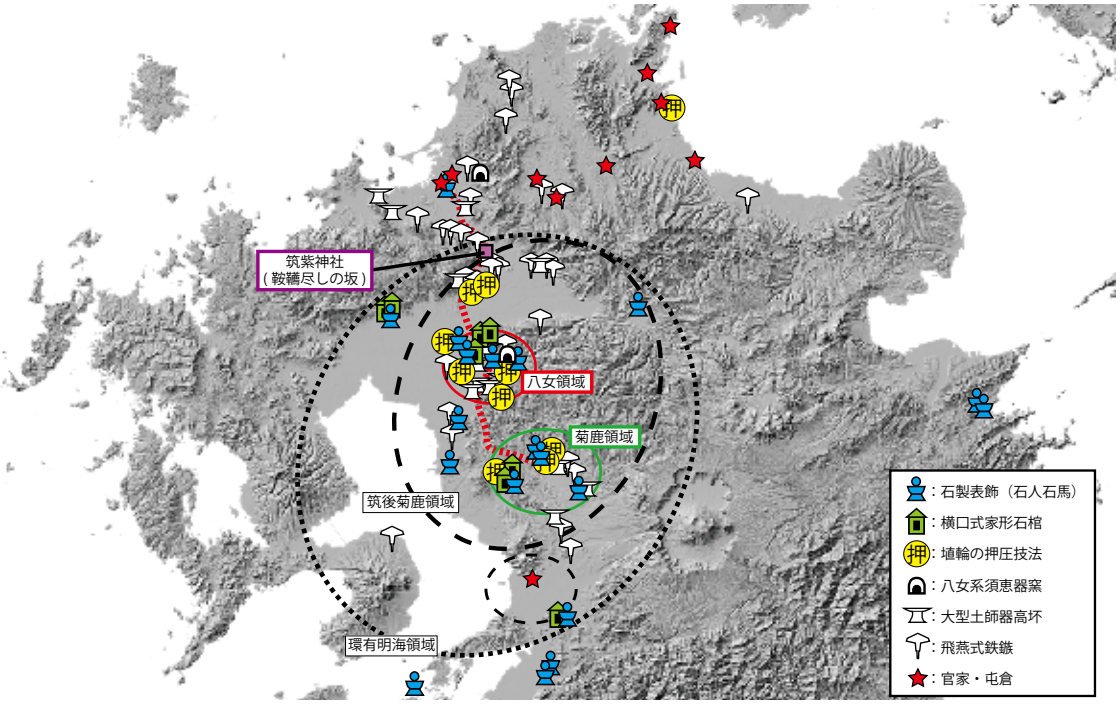
磐井の寿陵　遺跡動態をふまえると、岩戸山古墳築造を契機として吉田群という新興墓域が形成されるだけでなく、八女丘陵東西の生活基盤（東西路・灌漑機構整備）が拡充されている（図３）。また、藤山を越えて広川低地･福島低地を縦走する「藤山道（南北路）」は、岩戸山古墳が「見立山」の役割を果たしている。そして、これらの墓域設定・生活基盤整備を主導した人物が筑紫君磐井であると結論できる。磐井は大王の宮出仕後（帰郷後）の族長就任を経て、ヤマト王権中枢で学んだ統治方式・技術体系を遺憾なく発揮したと言えよう。ただし、本見解は「岩戸山古墳＝筑紫君磐井の寿陵」という学説を前提としている（森1956・1977）。同説の学術的検証を深めるものが、岩戸山古墳出土の土器と墳丘表飾である。岩戸山古墳出土土器は年代幅が大きく、６世紀前半（MT15型式期新相）～７世紀初頭（TK209型式期）の製品が含まれ、約100年間にわたる儀礼痕跡がある。磐井が葬られたかは定かでないが、６世紀前半に筑紫君が埋葬されたことは認めてよく、一族の追葬も７世紀初頭まで継続したと把握できる。墳丘表飾で最も数量が多いＶ群系円筒埴輪は外面二次調整のＢ種ヨコハケがなく、６世紀初頭（MT15型式期古相）築造の八女丸山古墳出土Ｖ群系円筒埴輪よりも後出する。したがって、土器･墳丘表飾の帰属時期は「岩戸山古墳＝筑紫君磐井の寿陵」説と矛盾しない。

３.「筑紫君磐井の乱」の検証

磐井と那津　資料蓄積は進んでいるものの、筑紫君磐井の外交関係については十分な分析対象資料が得られていない。『日本書紀』では戦後処理において、筑紫君葛子が「糟屋屯倉」を献上したことから、那津（博多湾）に筑紫君に帰属する集団が存在したことが想定されている（図4）。本想定と直結しないが、糟屋地域には「八女系須恵器」を生産した若杉今里窯が飛び地的に存在する。また、甕依姫が奉斎した筑紫神は、筑紫平野から福岡平野へと抜ける南北路の要衝（筑前･筑後の堺）に坐しており、那津と筑紫君の連結を想起させる。

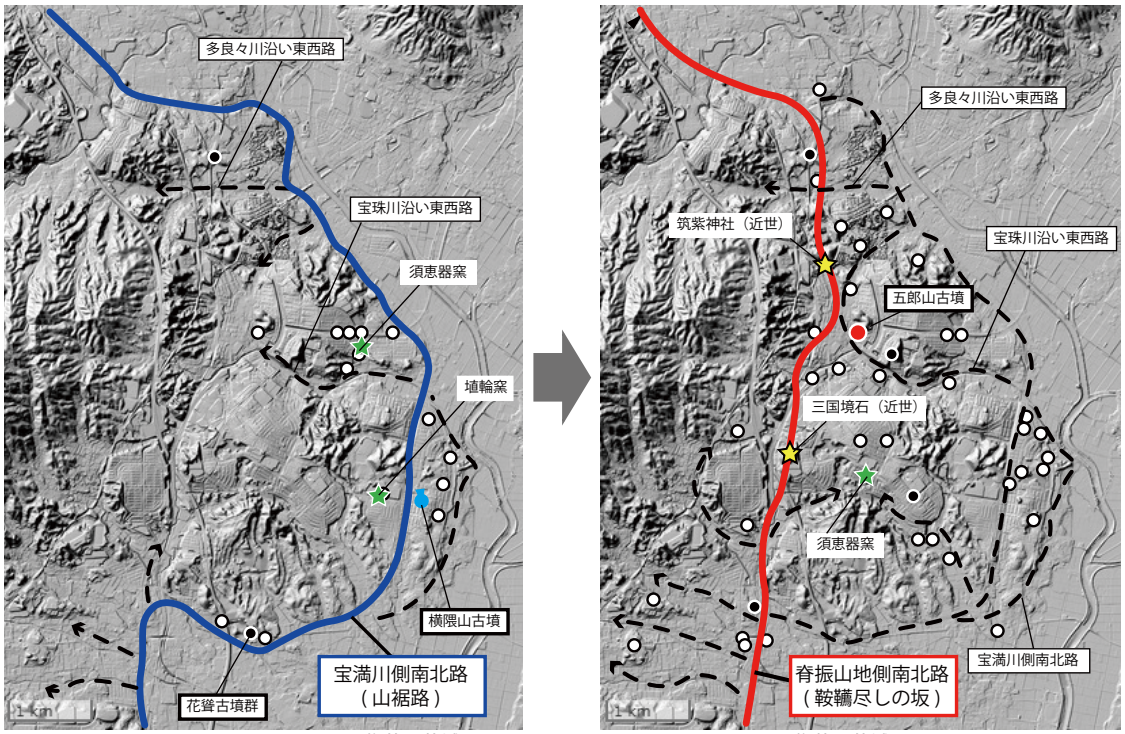
乱の戦場　筑紫君磐井の乱は「①磐井による近江毛野臣の進軍阻害→②大王の宮における磐井討伐軍の編成→③筑紫の御井で筑紫君磐井と討伐軍の交戦」という段階を経るが、決戦となった御井以前の緒戦については記録がない。筑紫神社が御井よりも北側に位置することをふまえると、総体としての磐井の乱は「那津－三国丘陵－御井」をつなぐ南北路（筑紫縦貫道）で展開したと見るのが妥当である。最終戦場となった御井は南筑平野の関門であり、主戦場としては筑後川渡河地点が最有力候補となる。戦場に直結する考古資料としては、「三国丘陵－御井」間の南北路沿いで見られる複数の焼失住居が候補に挙がっている。

ヤマトの軍事動員　乱の起点となった近江毛野臣の進軍阻害は、動員兵数６万という徴兵に対する筑紫君の消極的対応と捉えた方がよく、戦闘があったとしても近江毛野臣軍との交戦は小規模な



八女領域：筑紫君の主たる直接動員範囲
菊鹿領域：筑紫君と継続的に協力関係にある豪族の動員範囲（間接動員範囲）
筑後菊鹿領域：筑紫君に同調した豪族が多かったと見られる範囲
環有明海領域：乱前より筑紫君と協力関係（有明首長連合）にあり、筑紫君に同調した豪族を含む範囲
筑紫・火・豊：「筑紫君磐井の乱」の最大参画範囲（九州山地以北）

図４　筑紫君の直接動員範囲と間接動員範囲



：前方後円墳　●：大型円墳　○：集落・墓域
＜古墳時代中期の推定交通路＞

●：大型円墳　○：集落・墓域　※国土地理院地図利用
＜古墳時代後期の推定交通路＞

図５　「鞍轡尽しの坂」と三国丘陵周辺の遺跡動態

ものであった可能性が高い。つまり、ヤマトとツクシの衝突は、近江毛野臣を将軍とする軍事動員に対する反発が発端であり、近江毛野臣軍の実数は極めて限定的（近江毛野臣の同族集団＋部曲）であったと見る。ここに、筑紫君磐井の乱が長期間におよんだ要因があり、物部麁鹿火（もののべのあらかひ）を将軍とする別個の討伐軍を新規に立ち上げねばならず、多くの伴部を配下にもち、軍事氏族とも称される物部・大伴氏による新規動員を別途に編成する必要があった。

ツクシの軍事動員　筑紫君磐井の乱におけるツクシの主力は、筑紫君磐井の同族集団と部曲である。大型墳築造と生活基盤整備を根拠にすると、広川低地・福島低地が彼らの主要居住域であり、同地を筑紫君磐井の「直接動員範囲」と捉えてよい（図４）。また、糟屋屯倉献上（『日本書紀』）や筑紫神の奉斎（『筑後国風土記』）、肥前国養父郡・筑紫火君（『続日本後紀』）等の存在をふまえると、那津－八女間の南北路でも飛び地的に同族集団・部曲が分布していたと見られる（図５）。他の文字史料では、『日本書紀』で筑紫国造と同族関係と記される膳臣等が豊に分布する。

これらに加えて注目できるのが、「筑後型横穴式石室墳（胴張り式石室）」の成立である。石室下部の立方体構造を省略し、石室下部からドーム形天井（穹窿状天井）を構築する筑後型は、筑紫君磐井と同時代に普及した古墳築造範型である。その分布範囲は南筑平野と両筑平野南部に広がり、日岡古墳等の首長墓築造による労役を結節点として各集団に拡散した。古墳築造動員体系と軍事動員体系の基軸は重複することから、筑後型の分布範囲は動員範囲の有力候補となる。ただし、筑後型分布域と筑紫君を直結する理解は誤りであり、同分布域の形成には複数豪族（水沼君・的臣等）が携わっている。したがって、筑後型分布域の多くは他の豪族との連携で成立する「間接動員範囲」と捉えるべきである。なお、この間接動員で筆頭になるのは、古墳時代中期より南北路で結ばれた菊鹿盆地であり、古墳時代中期～飛鳥時代にかけて墓制・物資流通で強固に繋がっていた。

４．国造制下の八女古墳群

二つの首長系列墓　岩戸山古墳を基点とした吉田群は、「①６世紀前半～７世紀初頭におよぶ岩戸山古墳への土器供献（追葬）、②八女古墳群最後の大型前方後円墳・乗場古墳（６世紀後半）、③八女古墳群最後の大型墳・岩戸山4号墳（7世紀中頃）」から、古墳墓制の終焉（孝徳朝の天下立評）にいたるまで、筑紫君の主要墓域であったと把握できる（図１・５）。吉田群と豊福川群に挟まれた宅間田群は、６世紀中頃～６世紀後半築造の大型墳（鶴見山古墳→善蔵塚古墳）が集中する墓域である。この吉田群・豊福川群の関係を検討することで、筑紫国造に任じられた筑紫君族長の実態が見えてくる。

現状の資料蓄積では、「①岩戸山古墳・善蔵塚古墳墳丘は今城塚古墳墳丘の相似形（小澤2009）」、「②岩戸山古墳・鶴見山古墳は石製表飾を設置」、「③吉田群はⅤ群系埴輪（断続ナデ技法）、宅間田群はⅣ群系埴輪（押圧技法）を設置し、墓域別に埴輪生産体制が分離（小嶋2023）」、「④吉田群・宅間田群はともに最上位の古墳築造範型は八女型で、大型石材を用いた立方体構造の石室を構築（小嶋2023）」することが明らかとなっている（図２）。共通点①・②・④は、筑紫君一族としての一体

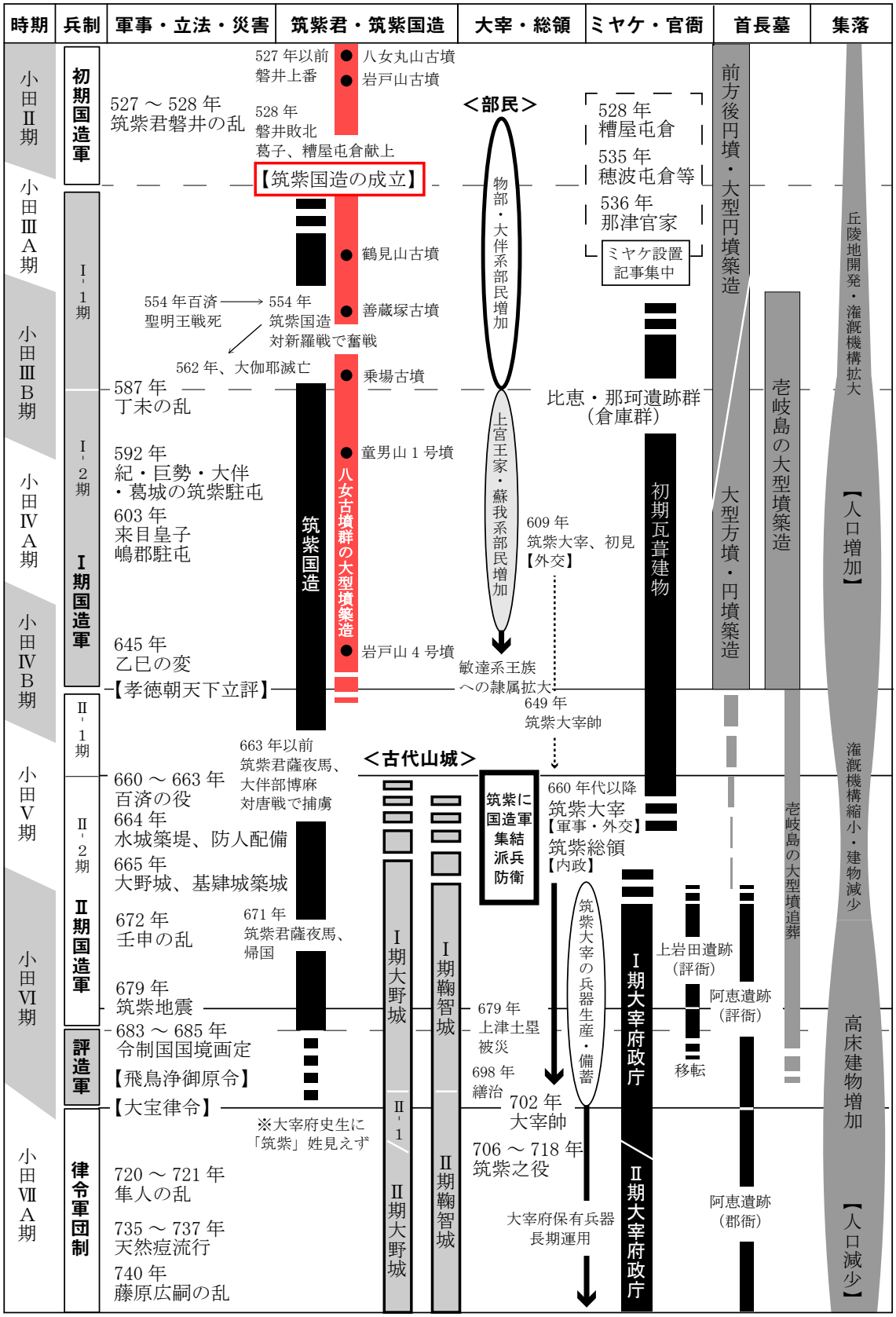


図６　筑紫君と筑紫洲の動態

性を示す物証である。相違点③は墓域別に古墳築造体制を組織し、かつ累代的に踏襲していたことを示しており、筑紫君の族長を輩出する系列（血脈）が二系列に分かれていたことを想起させる。

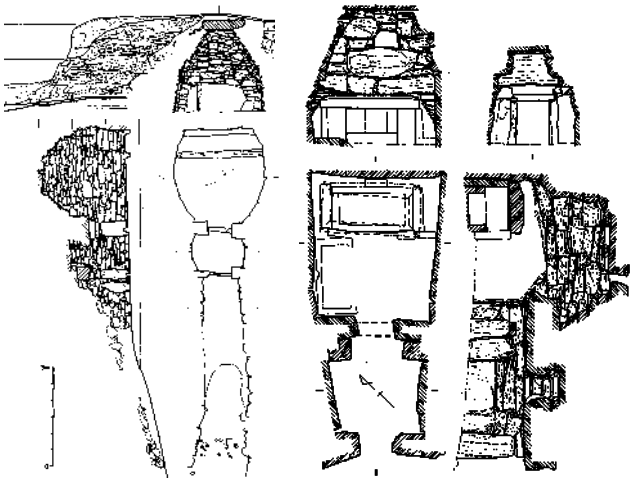
山内群と星野川　山内群は八女古墳群東端の新興墓域（童男山古墳群）で、石製表飾も確認されている（小澤1992）。墓域の眼下では、筑肥山地を下った星野川が福島平地へと流れ出ている。同地における星野川川床には結晶片岩露頭が存在しており、河川作用による川底低下が少なく、取水堰の設置にも適している。実際に近世には「山ノ井堰」が設置されており、福島低地中央部を横断する人口河川・山ノ井川の重要起点となっている。古墳時代における取水の有無は今後の検証課題であるが、筑紫国造の時代における灌漑機構のさらなる拡大を示唆している。

童男山古墳群に見られる「火」と「紀」の要素　童男山古墳群で最初に築かれた童男山1号墳は、結晶片岩の塊石・板石を積み上げた巨石墳である（図５）。菊鹿盆地の肥後型横穴式石室墳と共通要素（複室構造・石屋形・天井石架構方法）が多く、古墳時代後期後半（六世紀後半）段階における筑紫と火の繋がりを実証する。一方で、童男山1号墳の周囲に営まれた古墳（童男山７号墳・11号墳等）では、石室立体空間が「四角錐台」形をなし、ドーム形天井石室群である筑後型・八女型・肥後型との技術断絶（天井石架構技術の断絶）が認められる（図５）。このような断絶現象は、同時期の八代海沿岸域においても生じており、大野窟古墳と天王塚古墳との対比から紀国で成立した「岩橋型横穴式石室墳」との関係が注目されている（古城2012）。

岩橋型は、畿内型に加えて、九州西部で育まれてきた石障・長い羨道（合掌構造の羨道）・板石閉塞を融合させた古墳築造範型である。言うなれば、古墳時代後期後半段階に「逆輸入」される形で九州西部にもたらされたと評価できる。童男山古墳群の場合、利用石材が岩橋型と同じ結晶片岩であるため、八代海沿岸域の古墳よりも「岩橋型」により近い形態となっている。紀氏は雄略朝より朝鮮半島への軍事動員に加わっており、『日本書紀』にも紀小弓（雄略天皇九年、対新羅戦）、紀大磐（顕宗天皇三年、対百済戦）、紀男麻呂（欽明天皇二三年、対新羅戦）等の活躍が記されている。本期間はまさしく、岩橋型横穴式石室墳の成立と伝播（逆輸入）の時期と重なっており、軍事動員（国造軍派兵）を通じて、筑紫君・火君等との協力関係を構築したと考えられる。

【参考文献】
小澤太郎1992「八女市童男山古墳群採集の埴輪について」『九州考古学』67 九州考古学会
小澤太郎2009「墳丘築造規格の継承」『地域の考古学』佐田茂先生佐賀大学退任紀念論文集
小田富士雄1970「磐井の反乱」『古代の日本』3 角川書店
小嶋篤2023「筑紫君の墓域と開発」『九州歴史資料館研究論集』48 九州歴史資料館
小嶋篤2024「筑紫君と「鞍轡尽しの坂」」『九州歴史資料館研究論集』49 九州歴史資料館
古城史雄2012「横穴式石室からみた大野窟古墳」『大野窟古墳発掘調査報告書』熊本県氷川町教育委員会
森貞次郎1956「筑後風土記逸文にみえる筑紫君磐井の墳墓」『考古学雑誌』41－3 日本考古学会
柳沢一男2014『筑紫君磐井と「磐井の乱」』シリーズ「遺跡を学ぶ」094 新泉社

※図１・３～５は国土地理院地図を基に作成した。



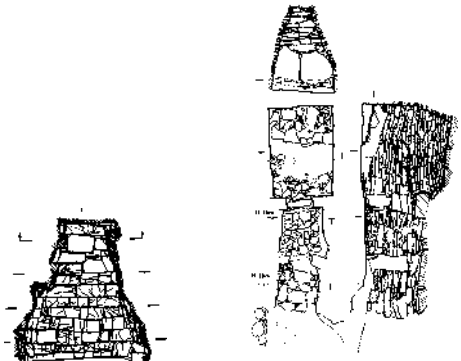
山内２号墳
（筑後型）

童男山１号墳
（肥後系）

肥後型の天井石見上げ（二軒小屋古墳）

５世紀後半～６世紀前半に生じた「朝鮮半島からの第二波及」により、九州各地で「穹窿状高天井石室群（ドーム形天井石室群）」が成立する。八女古墳群では、石室下部の立方体構造を省略した「筑後型横穴式石室墳（胴張り式石室）」を技術基盤としつつ、菊池川流域の「肥後型横穴式石室墳」と複室構造や石屋形等の諸施設を共有した。

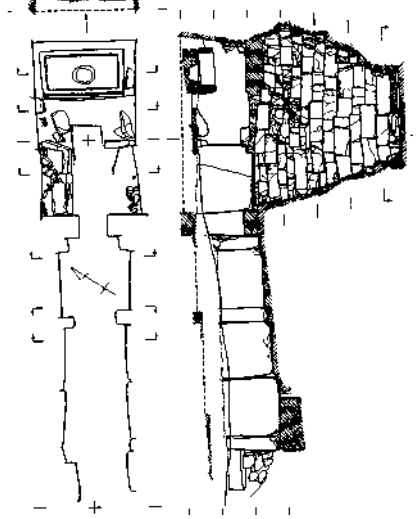
【石室立体空間「半球体」・「立方体（石室下部）＋半球体（石室上部）」の横穴式石室墳】



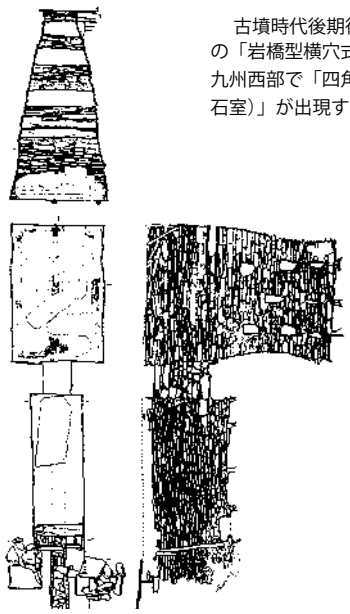
童男山 11 号墳
（岩橋系）

岩橋型の天井石見上げ（前山 A32 号墳）

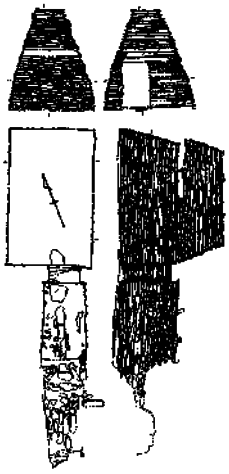
古墳時代後半期後半（６世紀後半）には、紀伊の「岩橋型横穴式石室墳」が局所的に伝播し、九州西部で「四角錐台形高天井石室群（岩橋系石室）」が出現する。



大野窟古墳
（八代型（岩橋系））



天王塚古墳
（岩橋型３型式）



大谷山 22 号墳
（岩橋型２型式）

【石室立体空間「四角錐台」形の横穴式石室墳】

図７　八女古墳群を取り巻く横穴式石室墳の様相

報告２

筑紫国造とヤマト王権

九州歴史資料館　　酒井 芳司

はじめに

国造は、ヤマト王権が、地域の有力豪族（首長）を任じた地方官である。『先代旧事本紀』収録の「国造本紀」やその他の史料にみえる国造の総数は、重複等を省くと、130あまりの国造が全国に置かれたと伝える（大川原2009）。その成立時期や設置された範囲、性格などについては、近世以来の膨大な研究史がある（新野1974）。国造制の研究史の厚さは、ヤマト王権の支配制度である氏姓制、部民制、屯倉制についても同様である（前之園1976、武光1981、舘野1978・1999、篠川・大川原・鈴木編2013・2017、歴史科学協議会編集委員会編2024）。

筑紫君磐井の乱後、磐井の息子の葛子が献上したと伝える糟屋屯倉を最初として全国にヤマト王権の支配拠点であるミヤケが置かれた。ミヤケの表記は、『日本書紀』は屯倉・官家・弥移居、『古事記』は屯家・三宅・屯宅、『播磨国風土記』は御宅・三宅、山ノ上碑・金井沢碑は三家など多様である（舘野1978）。本報告でミヤケを表記する際は、ミヤケ一般はミヤケとし、個々のミヤケについては史料の表記に従う。地域の豪族たちは、ヤマト王権によってミヤケの管理を委任され、その支配下の人民を率いて、部民としてミヤケに奉仕させ、それによって規模に応じてヤマト王権から国造・伴造・県稲置に任じられた。国造制の成立時期について、今日では、ミヤケ制や氏姓制、部民制とともに６世紀前半に成立したと考えられている（篠川1996・2021、舘野1999、鎌田2001a、大川原2009、篠川・大川原・鈴木編2013・2017）。したがって、磐井の乱の時には、まだ国造制は成立していないので、『日本書紀』が磐井を「筑紫国造磐井」とするのは、編者による潤色である。氏姓制の成立も継体朝と考えられているが、磐井の乱の前か後かは微妙なところで、磐井が筑紫君の氏と姓を与えられていたかどうかは判断が難しい。本報告ではヤマト王権からの筑紫君賜姓が乱後であるかも知れないという留保付きで、磐井を「筑紫君磐井」と表記する。

さて筑紫君葛子も当初は、糟屋屯倉の管理者となることで初代の筑紫国造に任じられたと考える。本報告では、筑紫国造とミヤケ制・部民制との関わりを中心に、磐井の乱後の筑紫国造とヤマト王権の関係を明らかにし、筑紫国造の国から律令制の筑前国・筑後国への転換の過程を概観することにしたい（以下、本報告の内容は、酒井2024による）。

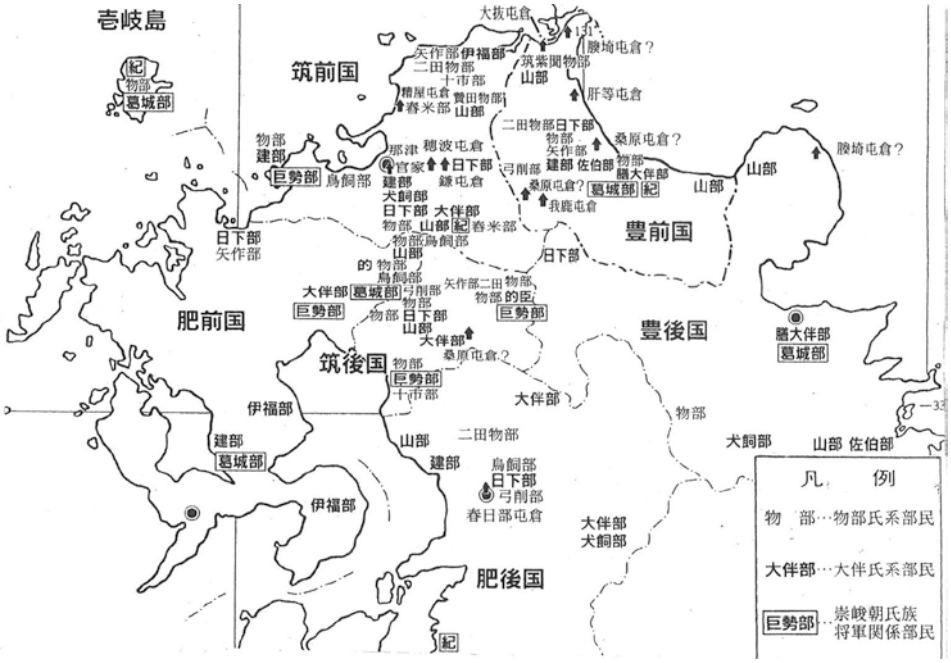
１　磐井の乱とミヤケ（屯倉・官家）の設置

磐井の乱の原因は、直接的には朝鮮半島政策をめぐるヤマト王権と磐井の対立が背景にある。『日本書紀』や『古事記』によると、継体天皇21年（527）、新羅が加耶諸国に侵攻する情勢のなか、ヤマト王権は加耶諸国を救援するために近江毛野を派遣するが、新羅と独自の交流をもっていた磐井は毛野の軍を妨害する。ヤマト王権は翌年に大伴金村と物部麁鹿火を遣わして磐井を討ち、葛子は贖罪のために糟屋屯倉を献上したと伝える（『古事記』継体天皇段、『日本書紀』継体天皇21年６月甲午条～同22年12月条）。実際には磐井が糟屋に持っていた港湾施設をヤマト王権が接収して屯倉としたということであろう。これによって葛子の死罪をヤマト王権が赦したと伝えることから、ヤマト王権が磐井を討った大きな目的は、地域首長の独自外交を否定し、外交をヤマト王権に一元

化することにあったとみられる。

磐井の乱の前には、九州北部の首長層と広く連合し、その盟主として磐井は継体天皇の王権を支えていたが、ヤマト王権と戦うことになった際に、胸肩君（むなかたのきみ）や水沼君（みぬまのきみ）、火君（ひのきみ）などの有力首長はヤマト王権に協力し、磐井は新羅系渡来人の秦氏（はたうじ）系氏族や同族の豊前地域の膳臣（かしわでのおみ）などを味方として戦ったとみられ、九州北部の首長層は一枚岩でヤマト王権と戦うことはできなかった。

磐井を討った物部麁鹿火と大伴金村は、九州地方の有力首長（クニ＝郡程度の人間集団を支配）の支配下にある中小首長（ムラ＝郷程度の人間集団を支配）をそれぞれ支配下に置き、中小首長支配下の人民を物部氏系・大伴氏系部民として編成した**【図１】**。



【図１】

安閑天皇２年（535）５月、物部氏系・大伴氏系部民の編成を前提とし、それぞれの近傍に、ヤマト王権はその支配拠点として、筑紫・肥・豊三国の屯倉を設置する（『日本書紀』安閑天皇２年５月甲寅条）。ただし、その実年代は後述のように６世紀半ば頃とみられ、この三国も７世紀後半に設置された国宰（くにのみことも ち こくし）（国司の前身）の国であり、６世紀にはまだこのような国の区分はなかった。なお筑紫・肥・豊三国の屯倉とは、筑紫の穂波屯倉（福岡県飯塚市）・鎌（かまの）屯倉（嘉麻市鴨生）、豊国の膃崎（みさきの）屯倉（北九州市門司区、または大分県国東半島）・桑原屯倉（福岡県八女郡黒木町、または築上郡築上町、田川郡大任町）・肝等（かとの）屯倉（京都郡苅田町）・大抜（おおぬくの）屯倉（北九州市小倉北区貫）・我鹿（あかの）屯倉（田川郡赤村）、肥（火）国の春日部屯倉（熊本市国府）であり、筑紫君の勢力圏を取り囲むように設置された。乱後に筑紫君葛子が献上した糟屋屯倉とあわせ、豊前・豊後方面から博多湾に至るルートをヤマト王権が掌握し、筑紫君を牽制しつつ、朝鮮半島における戦争遂行のための兵糧や兵力を動員する拠点を構築したのである。

ところで一般にヤマト王権がミヤケの物資を輸送する際には、倭国王や中央豪族それぞれに仕えている地域首長に命じて、各首長が預かるミヤケの物資を運ばせるという、人格的な縦割りの命令系統で輸送がおこなわれた**【史料１】**。したがって、物部氏系部民には物部氏をつうじて、大伴氏系部民には大伴氏をつうじてでなくては物資を運ばせることができないのである。九州北部各地にミヤケは分散し、かつミヤケ間の横の交通が確立していないこともあり、朝鮮半島での対外戦争を遂行する際に、三国の屯倉では緊急時に人的･物資動員をしようとしても、拠点とするには不十分である。

このような状況に対応するため、『日本書紀』によると、宣化天皇元年（536）５月、ヤマト王権は那津（博多）の口に官家を修造したと伝える**【史料１】**。それは三国に散在する屯倉の倉の一部を収蔵する穀ごと那津に移築して集めるという方法で行われ（鎌田2001b）、三国の屯倉に奉仕していた地域の中小豪族と支配下の部民は、地元の屯倉に加えて那津に移築された屯倉にも奉仕することになった。この那津官家の修造によって九州北部各地から穀と人を那津に恒常的に集中させる体制が成立したのである。それは大宰府の西海道（九州）総管の歴史的前提といえる。

【史料１】『日本書紀』宣化天皇元年（536）５月辛丑朔条（現代語訳）

夏五月の辛丑朔（１日）に、詔して、「食は天下の本である。黄金が万貫あっても、飢えを癒すことはできない。白玉が千箱あっても、どうやって凍えから救うことができようか。そもそも筑紫国は、遠近の国々が来朝する所、往復の関門となる所である。そこで海外の国は海の状態をうかがってやって来ては、賓客となり、天雲の様子を見ては、貢物を献上した。胎中之帝（応神天皇）より我が御世に至るまで、収穫した穀物を収蔵し、食糧を蓄積して来た。それをずっと凶年の備えとし、賓客を饗応する糧としている。国を安定させる方法は、これに過ぎるものはない。それゆえ、私は阿蘇仍君を遣わして（未詳である）、河内国の茨田郡の屯倉の穀も加えて運ばせよ。蘇我大臣稲目宿禰は尾張連を遣わして、尾張国の屯倉の穀を運ばせよ。物部大連麁鹿火は新家連を遣わして、新家屯倉の穀を運ばせよ。阿倍臣は伊賀臣を遣わして、伊賀国の屯倉の穀を運ばせよ。官家を那津の港に建てよ。筑紫・肥・豊の三国の屯倉は遠く離れて散在している。運搬するのに不都合である。もし必要となった場合、緊急に対応することは難しい。そこで諸郡に命じて（各屯倉の倉庫と稲穀を）分け移して運ばせ、那津の港に集めて建て、非常の場合に備え、長く人民の命の糧となるようにせよ。早急に郡県に命令を下して、私の心を知らしめよ」と仰せられた。

このようにヤマト王権は、那津官家を朝鮮半島における戦争遂行の拠点とし、各地の豪族たちを結集させることで､外交の一元化もはかったのである。そして筑紫の内政と外征軍を指揮する将軍は、大伴金村の息子である大伴磐・狭手彦の兄弟が就任したと伝える**【史料２】**。磐井の乱後の物部氏と大伴氏による九州各地の部民設置を前提としたものであり、その人格的なつながりを十分に活用して、磐と狭手彦は兵力や兵糧を動員したであろう。

【史料２】『日本書紀』宣化天皇2年（537）10月壬辰朔条（現代語訳）

冬十月の壬辰の朔（１日）に､天皇は新羅が任那（加耶）を侵略したため､大伴金村大連に詔し、

その子の磐と狭手彦とを遣わして任那を助けさせた。磐は筑紫に留まってその国の政治をとり、三韓（高句麗・百済・新羅）に備えた。狭手彦はかの地に赴いて任那をしずめ、また百済を救った。

ただし、**【史料２】**は朝鮮半島側の史料に対応する記述がなく、大伴氏家記にもとづく造作された記事の疑いがある。『日本書紀』欽明天皇23年（562）８月条にも大伴狭手彦が高句麗を討ったという記事があり、やはり造作が疑われる。ただし、この記事が引く一本に欽明天皇11年（550）にも狭手彦が百済とともに高句麗を討ったという記録があり、『三国史記』新羅本紀、真興王11年（550）春正月条・高句麗本紀、陽原王６年（550）春正月条・百済本紀、聖王28年（550）春正月条にも、百済が高句麗の道薩城を攻め取ったという対応記事があることから、狭手彦の朝鮮半島出兵は550年のことであったと考えられる（八木1986a）。とするならば、那津官家設置は遅くともその直前と推測され、新羅の加耶諸国への侵攻が540年代から本格化することとあわせて、那津官家設置の実年代は、『日本書紀』が伝える宣化天皇元年（536）ではなく、６世紀の中頃と推定される。三国の屯倉設置記事もその前提として安閑天皇２年（535）にかけられたもので、やはり実年代は６世紀中頃の設置だろう。

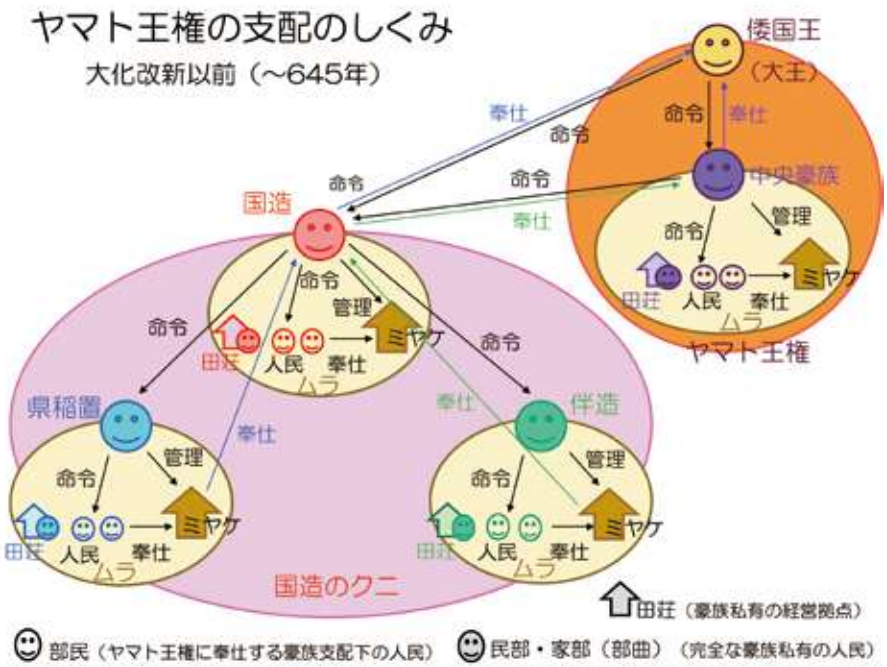
この那津官家の設置後、朝鮮半島の戦争において、九州北部の首長たちの活躍が多くみられるようになるのであり（『日本書紀』欽明天皇15年［554］12月条…竹斯物部莫奇委沙奇、筑紫国造［鞍橋君］、同17年正月条…筑紫舟師、筑紫火君など）、朝鮮半島への出兵基地として那津官家が機能したことが理解される。

次に筑紫国造が管理したミヤケについて考える。国造や伴造、県稲置など、ヤマト王権の地方の役職に就くには、ミヤケを預かることが前提であった**【史料３】**（大川原2007）。

【史料３】『日本書紀』大化元年（645）８月庚子条（現代語訳）

庚子（５日）に、（孝徳天皇は）東の国々の国司を任命し、国司たちに詔して、「天にいます神々の御委任に従って、まさにこれから、四方の国々を治めようと思う。（中略）もし地位を求める人がいて、もともと国造や伴造・県稲置でもないのに、いつわって『私は遠い先祖の時代からこの官家をお預かりして、この郡県を治めております』などと訴えてきた場合には、おまえたち国司は、そのいつわりのことばをそのまま朝廷に報告してはいけない。実状をはっきりさせてから報告するようにせよ。（後略）」と言われ、それぞれに布帛を賜った。

伴造は、部民に編成された人間集団の統率者であり、物部氏や大伴氏など中央豪族の伴造の支配下に地方伴造がある。地方の中小首長が中央豪族の支配下に入った場合、地方伴造となって、その支配地域に置かれたミヤケに統率下の部民を奉仕させた。県稲置は、国造の支配下の中小首長とみられ（『隋書』倭国伝に、軍尼の下に伊尼翼を置き、里長のようなものとあり、稲置のこととされる）、地方伴造と同じく、統率下の人間集団の一部を部民としてミヤケに奉仕させた。これら中小首長の管理する地域のミヤケと人間集団を一定の広範囲で統括するミヤケ（笹川1979が提唱する「統監ミヤケ」）を管理したのが国造であった。したがって国造が統括するクニは、領域的な地域支配組織ではなく、ミヤケに奉仕させられた人間集団の総体と考える**【図２】**。



【図２】

筑紫君が支配していた糟屋の港湾施設を葛子がヤマト王権に屯倉として献上したことで糟屋屯倉が成立し、葛子が初代の筑紫国造に任じられたとみられることから、葛子が当初管理したミヤケは糟屋屯倉であったと考える。しかし、「国造本紀」等の史料には、後の筑前国・筑後国の範囲には、胸肩君や水沼君、的臣など有力首長が多くいたのに、国造は「筑志（紫）国造」しか伝えられない。『先代旧事本紀』巻10、国造本紀の西海道の部分にみえる国造は、筑志国造、筑志米多国造（本拠地は現在の佐賀県三養基郡上峰町前牟田上米多・下米多で、後の肥前国に属する）、豊国造、宇佐国造、国前国造、比田国造、大分国造、火国造、松津国造（「松津」は「杵肄＝基肄」の誤記とみられる）、末羅国造、阿蘇国造、葦分国造、天草国造、日向国造、大隅国造、薩摩国造、伊吉島造、津島県直、葛津国造、多禰島国造である。筑紫国造は、南九州を除く九州の他の地域で、後の令制国の一国の範囲内に２～４の国造が分布するのと異なり、少なくともその管轄する範囲は、後の筑前国・筑後国にまたがる範囲に及ぶと考える。

糟屋屯倉も後には物部連の同族とされる春米連が管理したとみられる（黛1982）。さらに筑紫三家（三宅）連という首長（『古事記』神武天皇段、『日本書紀』天武天皇13年［684］12月癸未条）が存在するので、那津官家は当時、筑紫官家と呼ばれた可能性がある（八木1986a・b）。九州北部を広域に支配する拠点であった筑紫官家（那津官家）を現地において預かるに相応しい首長は、乱後、筑紫国造となった筑紫君葛子とその後裔たちではないだろうか。筑紫国造となった葛子は当初、糟屋屯倉を管理したが、那津官家が設置された後は、糟屋屯倉の管理を地元の中小首長である春米連に委ね、那津官家の管理にあたったのだろう。なお筑紫三家連は、『古事記』によると、火君・大分君・阿蘇君等とともに、神八井耳命の後裔とされ、乱後に筑前に進出した肥後の首長で、筑

紫国造の統括下で那津官家の管理の実務に当たった中小首長とみられる。

筑紫国造が主に管理したミヤケが那津官家であるとすると、先に指摘したように、筑紫・肥・豊三国の屯倉が穀輸送を通じて、那津官家の統括下にあったので、糟屋屯倉も含めて、飛び地的に後の豊前国や肥後国の一部の豪族や人民も那津官家と三国の屯倉を通じて、筑紫国造の管理下にあったとみられる。したがって、筑前国と筑後国の範囲を超えて、飛び地的に後の豊前国や肥後国の一部も含め、那津官家とその統括下の三国の屯倉に奉仕させられていた人間集団の総体が筑紫国造の筑紫国であった（笹川1985）。

ヤマト王権への服属と引き換えに筑紫君は勢力を保ったが、その代償として、王権の新羅との戦争に筑紫君を含む九州の豪族と人民は動員されることになった。そしてヤマト王権の百済偏重の外交は、唐・新羅連合軍と百済・倭連合軍が朝鮮半島西岸で戦った、天智天皇２年（663）８月の白村江の敗戦と百済の完全な滅亡に帰結する。磐井の末裔の筑紫君薩野麻も唐軍の捕虜となり、この戦争で筑紫君一族も多くの犠牲を強いられたのである。

なお筑紫国造が管理するといっても、ヤマト王権の命令に従って管轄する範囲内の伴造や県稲置に命じて人的・物的資源を差発するものであり、那津官家に集積した資源を運用するのは、大伴狭手彦と磐や、崇峻天皇４年（591）11月に派遣された紀・巨勢・大伴・葛城の四氏族将軍、推古天皇8年（600）に派遣された境部臣・穂積臣、同10年２月に派遣された撃新羅将軍久米王子など、中央豪族や王族の将軍であった。この将軍に推古朝に遣隋使派遣を契機として外交機能が加わり、筑紫大宰（大宰府の前身）へと発展する。

２　筑紫国造の筑紫国から律令制の筑紫国（筑前国・筑後国）へ

筑紫国造の筑紫国は、前節の検討から、論理的には遅くとも筑紫国造が那津官家（筑紫官家）の管理者となった時点では成立したと推測される。しかし筑紫国造の筑紫国の成立時期は、『古事記』や『日本書紀』からは、「ツクシ」地名を検討しても、潤色の可能性があるので、明確にし難い。幸いに『隋書』倭国伝に「竹斯国」がみえるので、7世紀初めには「ツクシ」と呼ばれる地域が九州北部に存在したことがわかる。

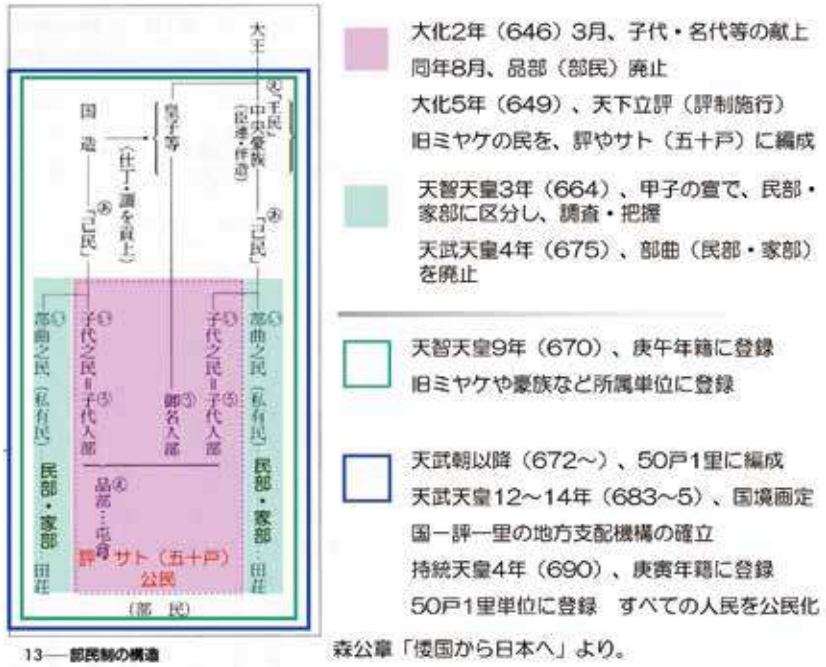
【史料４】『隋書』倭国伝（書き下し）

明年（大業４年＝推古天皇16年＝608年）、上（煬帝）、文林郎裴清を遣はして倭国に使せしむ。百済を度り、行きて、竹島に至り、南に躭羅国を望み、都斯馬国を経、迥かに大海の中にあり。又東して一支国に至り、又竹斯国に至り、又東して秦王国に至る。其の人華夏に同じ。以て夷洲と為すも、疑ふらくは、明かにする能はざるなり。又十余国を経て海岸に達す。竹斯国より以東は、皆な倭に附庸す。

『日本書紀』欽明天皇15年（554）12月条に、「竹斯物部莫奇委沙奇」、「竹斯嶋」という『隋書』倭国伝**【史料４】**と共通した表記がみえる。この記事も含め、欽明天皇紀の朝鮮半島関係記事の多くは百済系史料の『百済本記』によっているので（津田1950）、遡って６世紀半ば頃には、国際的に「竹

斯」と表記される「ツクシ」地名が成立していたとみられる。『隋書』倭国伝**【史料４】**にみえる「国」（領域的性格をもつ地域支配組織）と「軍尼（くに）」（領域性をもたない人間集団）は性格の相違があるが、「竹斯」や「一支」などの同一客体に対して中国と日本の双方から映じた表現とされ（大川原2007）、『隋書』倭国伝の「竹斯国」は、結果的に筑紫国造の筑紫国を指していると考えて良い。さらに筑紫物部は、磐井の乱後に筑紫国造と物部氏の統率下に置かれた九州北部の中小首長の氏族名とみられ、「竹斯物部莫奇委沙奇」から筑紫国造が統括する広域の筑紫国は６世紀半ば頃までは遡り得る。

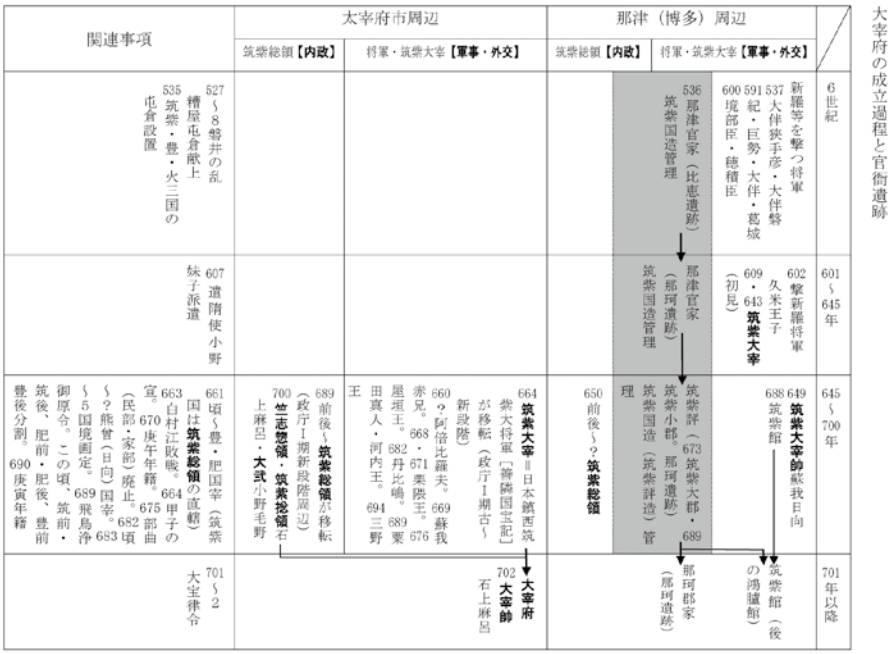
大化元年（645）に始まる大化改新では、ミヤケと国造・伴造・県稲置に統率されてミヤケに奉仕させられていた人民（部民）が評（こおり）や五十戸（さと）に編成され、公民化されたが、それ以外に地域首長や中小首長の私有民が存在していた。これら首長（豪族）私有民は、いくつかの改革を経て天武朝（てんむ）（672～86）以降に公民化される。それ以前、首長私有民も含めた全人民の動員は、国造の権力に依存せざるを得ず、天武朝以降の首長私有民の公民化によって、国造制の廃止と、律令制の国―評（大宝元年［701］以降は郡）―里の地方支配組織への一元化が達成される**【図３・４】**。



【図３】

『古事記』序文にみえる、その素材となった帝紀（ていき）と旧辞（きゅうじ）の虚実を定める作業は、天武天皇の生前に完了していたと考えられ、『古事記』の世界観は、奈良時代の知識による潤色はあるとしても、７世紀後半の天武朝頃には形成されていたと考えて良い（酒井2013）。したがって、『古事記』上巻の国生み神話にみえるように、７世紀後半のヤマト王権は、今日の九州地方に対して、筑紫嶋（九州島）、壱岐、対馬からなり、筑紫嶋については、筑紫国（つくしのくに）、豊国（とよくに）、肥国（ひのくに）、熊曾（くまそ）（熊襲）国（くに）の４つの地域に区分する認識を持っていたことがわかる。

この４つの国のうち、豊国・肥国・熊曾国は、「国造本紀」にみえる国造の国より広域であり、筑紫国も含め、斉明朝末年ないし天智朝初年頃（661年前後）から派遣されるようになった国宰の国（律令制の国に継承される）とみて良い。ただし、天武朝前半期までは、国宰の国は明確な領域を持たず、国造の国をいくつかまとめて管轄するもので、併存していたようである。天武天皇12～14年（683～５）に国境画定が全国的に行われ、領域で区分された律令制の国が成立し、これにともなって国造の国は廃止されたと考えられている（篠川1996）。さらに筑紫国・豊国・肥国は、持統天皇３年（689）の飛鳥浄御原令施行前後に、それぞれ前後に分割され、いわゆる三前三後の六国が成立した（長1991）。



【図４】

筑紫国造は大化改新後も、那津官家を継承した外交施設である筑紫大郡・筑紫小郡の管理に当たっていたと推測する。天武朝の国造制廃止後は、本拠地である筑紫国上陽咩評の評造（評司）を帯するのみとなり、８世紀以降の史料にはみえないものの、大宝元年（701）以降、律令制では郡司には国造が優先して任命される規定であったので（養老選叙令13郡司条）、上陽咩評を引き継いだ筑後国上妻郡の郡司となったと推測される。

さて古墳時代後期前半（６世紀前半）に筑紫君と肥君が開削した「鞍轡尽くしの坂」が那津への軍事動員と物資集積を担ったが**【史料５】**、白村江の敗戦後、天智天皇４年（665）に基肄城が築城され、基山の中腹を越える両国峠沿いの城山道が整備される（小嶋2024）。

【史料５】『筑後国風土記』逸文（現代語訳）

筑後という国名

（第二には、矢田部公望が思案するところ、『筑後国風土記』には次のように出ている）筑後

の国はもとは筑前の国と合わせて一国であった。昔、この両国の間にある山に険しく狭い坂があって、行き来の人が乗る馬の鞍の下に敷く布が擦り切れることがよくあった。これによって人々は鞍韉尽くしの坂と言ったことによる。

（第三案も風土記に次のように出ている）昔、この両国の国境の山の上に荒々しい神がいて、行き来の人の半分は通行できたが半分は命を失う有様であった。死亡する人の数はとても多かった。よって、「人命尽くしの神」と呼んだ。ある時、筑紫の君と肥の君らが占いによって（巫女を決め）、筑紫の君らの祖先である甕依姫を巫女として峠の悪神を祭らせた。それ以降、山を越える人で、神に襲われる人はなくなった。右の話によって筑紫の神と言い、筑紫の地名の由来ともなっている。

（第四案も風土記に次のように出ている）その国境の山で死んだ者を葬ろうとして、この山の木を切って棺を作った。それで山の木が「尽くさむ」（尽きよう）とした。これによって筑紫の国と呼ぶのである。

その後、二国に分けて、筑前の国と筑後の国としたのである。

城山道は駅路と推定され（木本2018）、この新たな幹線道路の設定は、筑紫国造が管理していた道の否定であり、持統天皇３年（689）前後の筑紫国の前後分割とともに、筑前国地域への筑紫国造の影響力を排除する意味があったのではないだろうか。

『別聚符宣抄』延喜14年（914）８月８日太政官符から、全国（43か国）に国造田が国ごとに６町ないしその倍数が設定されていたことが知られる。筑前国に６町、筑後国には12町の国造田が設定されていたが、筑前国の国造田は、筑紫米多国造、筑後国の国造田は筑紫国造のものと推定されている（篠川1996）。筑紫米多国造は、佐賀県三養基郡上峰町から神埼郡吉野ケ里町に分布する目達原古墳群を墳墓の地とする首長であり、筑前国に近接しているとはいえ、肥前国を本拠地とする首長に筑前国の国造田が与えられていることになる。この推定が正しければ、律令制下に筑紫国造は、他の国造の倍の12町の国造田を筑後国に与えられたとはいえ、筑前国への影響力を排除されていた可能性がある。

むすび

ヤマト王権は、朝鮮半島への出兵などで、律令制国家が完成するまでは筑紫国造の地域への伝統的支配力を利用した。しかし、神郡の宗像郡を設定して長くその地域支配を保証した胸肩君（宗形朝臣）などと異なり、律令制国家の成立後は、筑紫国造の影響力を本拠地に押しとどめようとしたのではないだろうか。８世紀前半の『筑後国風土記』が編纂される頃は、磐井が豊前国に逃亡したとして、筑後国府をして、『日本書紀』と異なる伝承を『筑後国風土記』に記録させるくらいには筑後地域で権力があったかも知れないが、その後は次第に地域社会への影響力を失って行ったものと推測する。

【参考文献】

井上光貞監訳2003『日本書紀Ⅰ～Ⅲ』中央公論新社
植垣節也校注、訳1997『新編日本古典文学全集　風土記』小学館
大川原竜一2007「大化以前の国造制の構造とその本質―記紀の『国造』表記と『隋書』『軍尼』の考察を通して―」（『歴史学研究』829号、歴史学研究会）
大川原竜一2009「国造制の成立とその歴史的背景」（『駿台史学』第137号、駿台史学会）
鎌田元一2001a「評の成立と国造」（『律令公民制の研究』塙書房）
鎌田元一2001b「屯倉制の展開」（『律令公民制の研究』塙書房）
木本雅康2018「肥前国基肄・養父両郡の古代官道」（『日本古代の駅路と伝路』同成社）
小嶋篤2024「筑紫君と『鞍轡尽しの坂』」（『九州歴史資料館研究論集』第49号、九州歴史資料館）
小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注、訳1994～1998『新編日本古典文学全集　日本書紀１～３』小学館
酒井芳司2013「神話と『古事記』『日本書紀』」（東京国立博物館･九州国立博物館編『国宝　大神社展』ＮＨＫ･ＮＨＫプロモーション）
酒井芳司2024『大宰府の成立と古代豪族』同成社
笹川進二郎1979「白猪史と白猪屯倉」（『論究日本古代史』学生社）
笹川進二郎1985「『糟屋屯倉』献上の政治史的考察―ミヤケ論研究序説―」（『歴史学研究』546号、歴史学研究会）
篠川賢1996『日本古代国造制の研究』吉川弘文館
篠川賢2021『国造―大和政権と地方豪族』中央公論新社
篠川賢・大川原竜一・鈴木正信編2013『国造制の研究―史料編・論考編―』八木書店
篠川賢・大川原竜一・鈴木正信編2017『国造制・部民制の研究』八木書店
武光誠1981『研究史　部民制』吉川弘文館
舘野和己1978「屯倉制の成立―その本質と時期―」（『日本史研究』190号、日本史研究会）
舘野和己1999「ミヤケと国造」（吉村武彦編『古代を考える　継体・欽明朝と仏教伝来』吉川弘文館）
長洋一1991「筑紫・火・豊国の成立」（下條信行他編『新版古代の日本３九州・沖縄』角川書店）
津田左右吉1950「百済に関する日本書紀の記載」（『日本古典の研究　下』岩波書店）
新野直吉1974『研究史　国造』吉川弘文館
前之園亮一1976『研究史　古代の姓』吉川弘文館
黛弘道1982「舂米部と丸子部―聖徳太子子女名義雑考―」（『律令国家成立史の研究』吉川弘文館）
森公章2002「倭国から日本へ」（森公章編『日本の時代史３倭国から日本へ』吉川弘文館）
八木充1986a「いわゆる那津官家について」（『日本古代政治組織の研究』塙書房）
八木充1986b「筑紫大宰とその官制」（『日本古代政治組織の研究』塙書房）
歴史科学協議会編集委員会編2024「特集／屯倉・国造からみる古代東国の地域社会」（『歴史評論』No.895、歴史科学協議会）
和田清・石原道博編訳1951『魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』岩波書店（岩波文庫）

磐井は天下の逆臣か、それとも地元の英雄か

朝日新聞社　　中村 俊介

歴史とは勝者の記録、とよく言う。敗者は勝者の活躍を引き立てるため、執拗なまでに不当におとしめられるのが常である。そう、大物であるならば大物であるほど。

ときは６世紀前半、古代最大の内戦といわれる「磐井の乱」（ここでは『日本書紀』という勝者の視点から、あえて「乱」と記そう）。北部九州一円に勢力を張った大豪族、筑紫君磐井は、大和政権が失地回復をめざして朝鮮半島へ差し向けた軍勢を遮り、１年に及ぶ大いくさの幕が開いた。史料はその傍若無人な振る舞いを、これでもかと描く。

しかし彼ほど評価が分かれる歴史上の人物も、そういないだろう。ときの継体大王に弓引いた九州の雄も大和政権側から見れば、もちろん反逆者。だが地元ではむしろ、中央からの負担にあえぎ抑圧に苦しむ領民に寄り添い、その圧政に敢然と挑んだ悲劇の英雄との見方も根強い。この手の人物像は尾ひれが付くうえ往々にして独り歩きするものだし、粉飾されるのは日常茶飯事だ。新羅からの賄賂を受け取っていたともいうが、いまとなっては闇の中。真偽は誰にもわからない。

『日本書紀』が伝えるところでは惨殺されたという磐井だけれど、『古事記』ではこれだけの大事件なのに、磐井（石井）は無礼なので殺された、とあるだけ。乱をどう評価すればいいのか揺れ動く編纂者の逡巡ぶりが言外ににじむようだ。地元の伝承を集めた『筑後国風土記』逸文にいたっては、追っ手をかいくぐって逃げ延びたというのだから、その結末はまるであべこべだ。これを単なる判官贔屓と片付けてよいものか。

少なくともはっきり言えるのは、これらの史料が成立した８世紀の時点で、すでに中央と地方とで磐井をめぐる正反対の評価が存在していたということである。

さて、この磐井、実はどこに葬られたかがわかっている。全国には16万基もの古墳があるが、墓誌などがない限り文献上の人物と照合させることは、ほぼ不可能。ところが磐井の場合は、それを可能にした数少ない例外なのだ。

その墓の名は岩戸山古墳（福岡県八女市）という。全長170メートル余の巨大前方後円墳で、堂々たる筑紫の盟主墳である。比定の経緯はおそらく別稿で詳しく紹介されるだろうからここでは詳しく述べないが、古くは久留米藩士の矢野一貞が注目し、戦後の九州考古学を率いた森貞次郎は風土記記載の記事を鮮やかに読み解いて、いまではすっかり「岩戸山古墳＝磐井の墓」説が定着した。

この古墳を印象づけるのが石製表飾、つまり石人石馬の存在だ。動物や人物、器財などいろんなものを石でかたどり、古墳を飾る造形である。福岡や熊本にまたがってみられる独特の文化で、そこに広域首長連合の存在を重ねる見方もある（柳沢一男 2014『筑紫君磐井と「磐井の乱」・岩戸山古墳』新泉社）。可塑性を持つ土でつくる埴輪よりはるかに手間がかかるだろうし、規模も大きなものが多いから、被葬者の生前の権勢を反映していると言ってもよさそうだ。

なかでも岩戸山古墳は質量ともに飛び抜けている。風土記逸文によれば、「衙頭」という区画があって、盗人の裁判シーンが演出されているとのこと。それが墳丘に付属した「別区」と呼ばれる空間らしい。裁判権といえば独立した首長の象徴だから、まるで磐井の治外法権を物語るかのようだ。いまも人形や馬などのレプリカが置かれているから、ぜひ散策してほしい。

ところで、みなさんは不思議に思わないだろうか。

磐井は大和政権にとって憎んでも余りある仇敵、それも古代日本を揺るがした希代の反逆者だ。負けたら最後、そこら辺に遺体が打ち捨てられてもおかしくない。なのに、代々の先祖が眠る一族の奥津城に、ここまで手厚く葬られたのはなぜなのか。岩戸山古墳は磐井自らが生前から築いていた寿墓ともいう。ならば、勝者の側が亡き宿敵に情けをかけて、わざわざ懇ろに葬ってあげたとでも言うのだろうか。それって少々、お人好しに過ぎないか。しかも、八女丘陵上では石人石馬の風習が乱のあとも綿々と続く。これも、なんだか釈然としない。確かに、磐井の息子、葛子は所領を差し出して許されてはいるのだけれど。

となると、そもそも磐井と大和王権ははたして決定的に対立していたのか、という根本的な疑問に突き当たる。磐井征伐を命じた継体大王の真の墓とされる今城塚古墳（大阪府高槻市）では、なぜか馬門石というはるか九州産の石材でつくった石棺の破片が見つかっているのも意味深だ。加えて、岩戸山古墳は今城塚古墳の相似形だとの説まであるのだから。それらは両者の関係がまだ良好だったころの名残なのか、はたまた……。ともかく、この２大巨頭の関係、一筋縄ではいかなかったらしい。

パネリストのみなさんは、これらの問いにどう答えてくれるだろう。乞うご期待。

ところで、岩戸山古墳が位置する八女古墳群付近には石人石馬のほかに、石棺の表面に不思議な模様を施したり壁に彩色画を描いたりする装飾古墳が点在する。直弧文などを浮き彫りした石人山古墳の石棺や弘化谷古墳に描かれた双脚輪状文は有名だ。ひょっとしたら岩戸山古墳の石室内にも未知の壁画があるのでは、との指摘もある。

最近、装飾古墳と磐井をつなぐ、こんな興味深い説が提出された。

かつて九州には祖先との系譜を重んじる風習があって、生者と死者とのつながりを示唆するものこそ石室空間の装飾だった。大和政権はそんな九州勢力の力をそぐため、この伝統的な葬送イデオロギーを断ち切ろうとした。この動きに対して反発したのが磐井だった――（河野一隆 2023『装飾古墳の謎』文芸春秋）。もしそうなら、磐井の乱とは単なる謀反などではなく、自らのアイデンティティーをめぐる深い異文化闘争の様相さえ帯びてくるのだけれど、さて。

「磐井の乱とは、地方の、地方による統治を実現する、避けられない戦いだった。」岩戸山古墳に隣接する岩戸山歴史文化交流館「いわいの郷」で流れるナレーションが、そう切々と訴えるのは、情に厚く国際情勢にも通じ、領民に愛された英雄像だ。なるほど、所かわれば評価もかわる。まるで忠臣蔵の悪役、吉良上野介が地元愛知県西尾市の吉良町では名君として慕われているように。磐井もまた然り、なのである。

史実はひとつ、でも後世の解釈は無数にある。だからこそ可能な限りの「真実」を引き出そうと、歴史学者や考古学者は奮闘する。歴史とは、かくも移ろいやすい。

ヤマト王権からみた筑紫

九州歴史資料館　　松川 博一

九州歴史資料館が取り組んできた古代史研究事業は、「筑紫から見た日本形成史の研究」とあるように、「筑紫」の視点からヤマト王権による地方支配、さらには古代国家「日本」の成立過程を解き明かしていこうとするものである。それでは、一方でヤマト王権から見て、「筑紫（ツクシ）」はどのように捉えられていたのであろうか。

とはいえ、そのことを直接に語る同時代史料が存在しているわけではなく、後世の史料を糸口として考えていくしかない。私が古代日本における大宰府や九州の位置づけについて説明する際によく使う史料として、『日本文徳天皇実録』仁寿２年（852）２月８日条がある。そこには、「大宰府は、西極の大壌にして、中国の領袖なり。東は以て長門に関となり。西は以て新羅に拒となる。しかのみならず、九国二嶋の郡縣は闊遠にして、古より今に、以て重鎮をなす。（中略）諸藩の輻湊、中外の関門というべきものなり」と記されている。実に九州の地理的な環境と国防・外交上の位置づけを簡潔に述べている。九州は「西極の大壌」＝西辺にある広大な領土であり、大宰府は「中国（日本のこと）の領袖」「重鎮」＝九州支配において極めて重要な存在であること、さらに新羅に対する「拒」＝対外防衛の最前線であり、「諸藩の輻湊」＝対外交流の拠点、かつ「中外の関門」＝日本と諸外国との出入口であることを雄弁に語っている。磐井の乱から300年以上ものちの史料であるが、古今に通じるものがある。諸外国の人々が四方から行き交う場所を意味する「諸藩の輻湊」にいたっては、この会場であるアクロス福岡＜ACROS Fukuoka＞の元となった「Asian Crossroads Over the Sea-Fukuoka（アジアのクロスロード福岡）」と重なる。

この九州観といえるものは、時代をさかのぼって『日本書紀』にもみることができる。それは宣化天皇元年（536）５月辛丑追朔日条、いわゆる「那津官家」の修造記事である。そこには宣化天皇の詔の中で、「筑紫国は遐く迩く朝で届る所、去来の関門にする所なり。もって、海表の国は海水を候いてもって来賓り、天雲を望みて貢奉る。（中略）その筑紫・肥・豊、三つの国の屯倉、散じて懸隔にあり、運び輸さんことはるかに阻れり。もし須要いんとせば、もってにわかに備えんこと難かるべし。また、よろしく諸郡に課して、那津の口に聚め建てて、もって非常に備えて、永く民の命となすべし。」と記されている。ここでは、「筑紫国」は「海表の国（諸外国）」が行き来する「関門」であること、筑紫・肥・豊の三国の屯倉が「懸隔」にあり「那津官家」が重要な九州支配の拠点であることを強調している。これらは、「那津官家」が大宰府の起源と見なされる所以である。本条をめぐっては、漢籍や後世の用語による潤色がみられることから、詔そのものの存在やその一部の内容を疑う見解も出されている。すべてを鵜呑みにすることはできないにしても、当時の「筑紫」観が反映されている可能性はあろう。少なくとも『日本書紀』が編まれた時代の「筑紫」観＝九州観が投影されていることは疑いようがない。

ここで目先をかえて、『万葉集』から「筑紫」観というものにアプローチしてみたいと思う。「筑紫（つくし）」の枕詞といえば、山上憶良の「日本挽歌」の冒頭「大君の 遠の朝廷と しらぬひ 筑紫の国に」（巻５－794）に代表されるように「しらぬひ」がよく知られている。それでは、「馬の爪」が「筑紫」に掛かる枕詞のひとつであることはご存知であろうか。東国防人であった倭文部可良麻呂

が天平勝宝７年（755）に詠んだ長歌に次のものがある。

足柄の 御坂賜はり 顧みず 我は越え行く 荒し男も 立しやはばかる 不破の関 越えて我は行く
馬の爪 筑紫の崎に 留まり居て 我は斎はむ 諸は 幸くと申す 帰り来までに（巻20－4372）

東国を出発した防人が難所とされる足柄坂や不破関を越えて、はるか遠く筑紫にいたる道のりを詠んだものである。ここに「筑紫」の枕詞として「馬の爪」がみえる。「馬の爪」が「尽きる」と「筑紫」を掛けている。「筑紫」の地が「馬の爪」つまり馬の蹄が擦り切れるほど、遠く離れた最果ての地という意味を含んでいると考えてよいであろう。

もうひとつ「馬の爪」が登場する歌として、大伴家持が詠んだ長歌がある。

天皇の 敷きます国の 天の下 四方の道には 馬の爪 い尽くす極み 船の舳の い泊つるまでに
古 よ 今の現に 万調 奉るつかさと 作りたる（後略）（巻18－4122）

この歌では、天皇が治めるべき支配領域である「天下」や「四方の道」のひろがりを示す際に、「馬の爪」が擦り減ってなくなる地の果てまで、「船の舳（先）」が行き着ける海の彼方までという表現が用いられている。

これに通じる表現は、重要な国家祭祀である祈年祭の祝詞の中にも確認できる。

皇神の見霽かし坐す四方の国は、（中略）青海の原は棹柁干さず、船の艫の至り留まる極み、大海原に舟満ちつづけて、陸より往く道は荷の緒縛い竪めて、磐根・木根履みさくみて、馬の爪の至り留まる限り、（後略）（『延喜式』巻８）

家持の長歌と同様に「馬の爪」と「船の舳（艫）」が対句となって、天皇の支配領域の範囲を表している。祈年祭のはじまりについては、天智朝もしくは天武朝とされている。ただし、「馬の爪」で表される天皇の支配領域観は、江田船山古墳出土鉄刀銘にみえる「天下」がそうであるように、さらに時代を遡る可能性は十分に考えられる。

『筑後国風土記』逸文の「筑紫」の国号説話にも馬が登場する。それによると、もともと筑前国と筑後国はひとつの国であったが、その国境にある坂が険しいため、往来する人の馬の「鞍韉」（鞍の下に敷く蓆）がすり切れてしまったので、人々が「鞍韉尽くしの坂」と呼んだと紹介されている。馬の蹄や鞍韉が尽きることをもって、領域や境界を示すという点は通底するものが感じられる。

「筑紫（つくし）」の語源や用例、成立時期、範囲を明らかにすることは、ヤマト王権が「筑紫」や「筑紫君」一族をどのように捉えていたのか、そして、筑紫君の勢力範囲や役割がどのように推移したのかを解き明かすヒントのひとつになるように思われる。そして、先述したように、「筑紫」の地が、「天下」「四方の国」における「西極の大壌」でありながら、「諸藩の輻湊」「去来の関門」として重要な役割を担い、「筑紫」の支配拠点が「中国の領袖」「重鎮」と位置づけられていたことは、ヤマト王権と筑紫君との関係を考える上でも重要な認識である。

戦乱の舞台「筑紫御井郡」の地形と歴史的環境

久留米市役所　小澤 太郎

はじめに　『日本書紀』継体天皇二十一年条によれば、磐井は川の流れを要害とし、峻険な山に陣取って反乱を引き起こした。倭王権から派遣された大将軍物部麁鹿火は、賊師磐井と筑紫の御井郡で交戦したとされる。両者の決戦場となった御井郡とはどのような場所であったのか、地形や歴史的な視点から述べてみたい。

水陸交通の要衝　筑紫平野は九州一の大河筑後川の流れによって形成された。御井郡はその中流左岸、現在の久留米市中央部と右岸の同市北野町、小郡市南部、三井郡大刀洗町南部に跨る。久留米市街地の東方には耳納山地が横たわるが、西端部の高良山（標高312.3m）は、筑後一宮高良大社が鎮座する神奈備として知られている。

高良山麓には、古藤山道や山辺道が走り、九州北部における陸上交通路のハブとして機能してきた。一方、筑後川が注ぐ有明海は干満の差が最大５m以上と大きく、これを利用した水上交通が発達した。『日本書紀』雄略天皇十年条には、身狭村主青らが呉国からの帰国する際、有明海から筑後川を遡り筑紫へ至ったことが伺える記事がある。また、筑後川流域の装飾古墳では、外航用のゴンドラ船

御井郡の位置と主要交通路、前方後円（方）墳の分布

が主要な図像モチーフの一つとなっていることも、船の恒常的な使用を示している。なお、筑紫平野は船材として重用された楠の産地でもある。『肥前風土記』養父郡条には、耳納山地東部から造船のための木材を切り出し、高良山を梶山として、船や舵を造り備えたという記述がある。

軍事上の重要性　耳納山地は、水縄断層帯の活動により隆起した山地で、東西長は約26kmを測る。その背峰はほとんど起伏が無く、別名を屏風山とも呼ばれる。筑後川右岸から同山地北面を眺めれば、まるで筑後地域への侵入を防ぐ巨大な防塁のようにも見える。

一方、その西端部に位置する高良山は、筑紫平野の中央部に半島状に突出して筑紫平野を見下ろす。このため好天時には、約25km四方を見通すことが可能である。ここからは、軍勢の駐屯や移動も用意に把握できよう。『肥前国風土記』基肄郡条にあるように、景行天皇が「国見の山」として「国内遊覧」したとの記事も示唆的である。

古代の神籠石式山城にはじまり、中世以降も数多くの山城が築かれ、山麓の御井郡一帯は幾多の戦乱の舞台となった。建武年間（1334-1338）以降、高良山は南朝方の懐良親王や幕府方の一色氏の陣所となっている。戦国時代には、豊後大友氏が遣明船派遣事業推進のため、筑後川とその流域を掌握した。平時の筑後川は交易の動脈であるが、戦時には兵站輸送に大きな役割を果たしたことであろう。その後、大友氏は筑肥進出にあたり高良山を全山要塞化して、肥前龍造寺氏や薩摩島津氏に対抗した。

筑後川と高良山をめぐる主な戦い　御井郡を舞台とした主な戦い（演習含む）には、①磐井の乱、②筑後川の戦い、③明治44年陸軍特別大演習などがあげられる。

①は、主戦場が御井郡で川を要害とし峻険な山に陣取るなど、１年半に渡って倭王権軍に抵抗したと言われる。川は筑後川、山が高良山一帯を指すことは想像に難くない。

②は、正平14年（1359）、筑後川を挟み北朝方約６万、南朝方約４万が対峙し、両軍で約２万５千人を超える死傷者が出したと言われる激戦である。南朝方は耳納山地に陣を構え、筑後川右岸に布陣する北朝方と対峙している。しかし、ついに南朝方が筑後川を渡河し、右岸に進出した。これを受けて北朝方は宝満川の対岸まで退却して陣を構築したが、南朝方は夜襲を仕掛け、北朝方の反撃を受けながらも戦いを勝利に導いた。

③は、明治44年（1911）11月に久留米市付近を舞台に実施された。南軍は熊本第六師団と久留米第十八師団、北軍は小倉第十二師団を中心に編成されている。同月11日、両軍は福島（八女市）と羽犬塚（筑後市）付近で遭遇戦を交えた後、北軍は筑後川右岸に退却、南軍は追撃し同左岸に進出した。12日夜半、北軍は更に後退し木山口（佐賀県基山町）に布陣した。南軍は払暁、筑後川を渡河し北軍を追撃している。

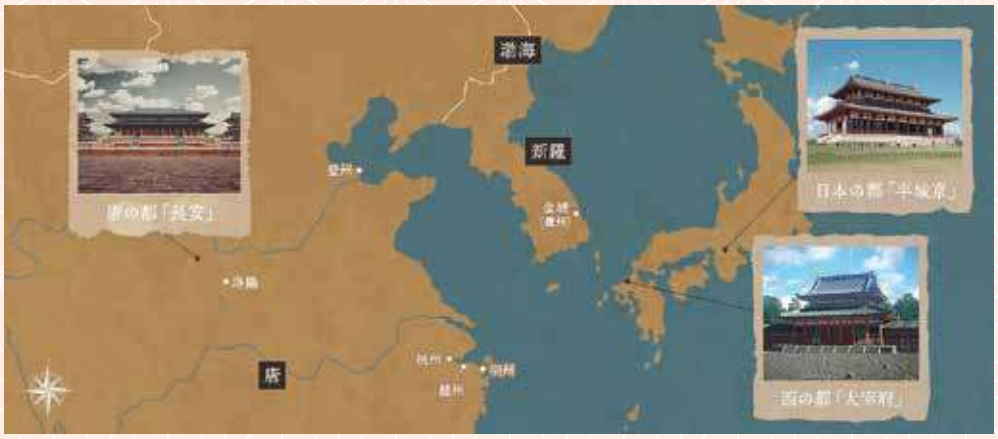
おわりに　以上のように、古来御井郡は陸上交通路と水上交通路の交差する衢となっている。特に高良山と山麓を走る水陸交通路は、戦術的な価値が極めて高い。これらは、筑紫平野で最も重要な緊要地形と接近経路である。加えて、筑後川と周囲の湿地帯は、人馬などの戦力の移動が困難な戦術上の障害となり、防御側には有利となる。地形と歴史が示すように、筑後地域を基盤とする勢力にとって、南下してくる敵勢力を防ぐには格好の場所であり、１年半に及んだ「磐井の乱」の主戦場に相応しいものと考える。

JAPAN HERITAGE
日本遺産

古代日本の「西の都」

～東アジアとの交流拠点～

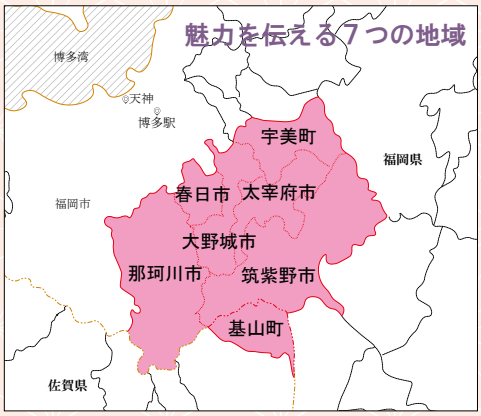
およそ 1,300 年前、日本の西、九州・筑紫の地に誕生した「西の都」大宰府。朝鮮半島の百済の都にならって築かれた前代の城砦群を外郭とし、その内側に唐の長安城にならって碁盤目状の区画をもつ街並みがつくられ、外国使節や商人がもたらす文化・文物が行き交う、東アジアの国際交流都市がありました。

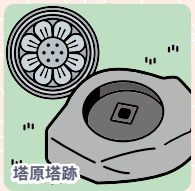


「西の都」の魅力を語る３０の文化財は、史跡や建造物、祭祀、美術工芸品など多彩です。

それらは７つの市町に広がり、壮大な都をめぐる交流の物語を今に伝えています。

現地を訪ねてみませんか？





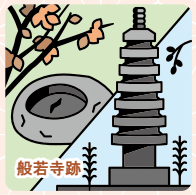
【問い合わせ先】
「西の都」日本遺産活性化協議会
（事務局：福岡県教育庁教育総務部文化財保護課）
〒812-8575　福岡県福岡市博多区東公園 7－7
e-mail:kbunkazai@pref.fukuoka.lg.jp

公式ホームページ

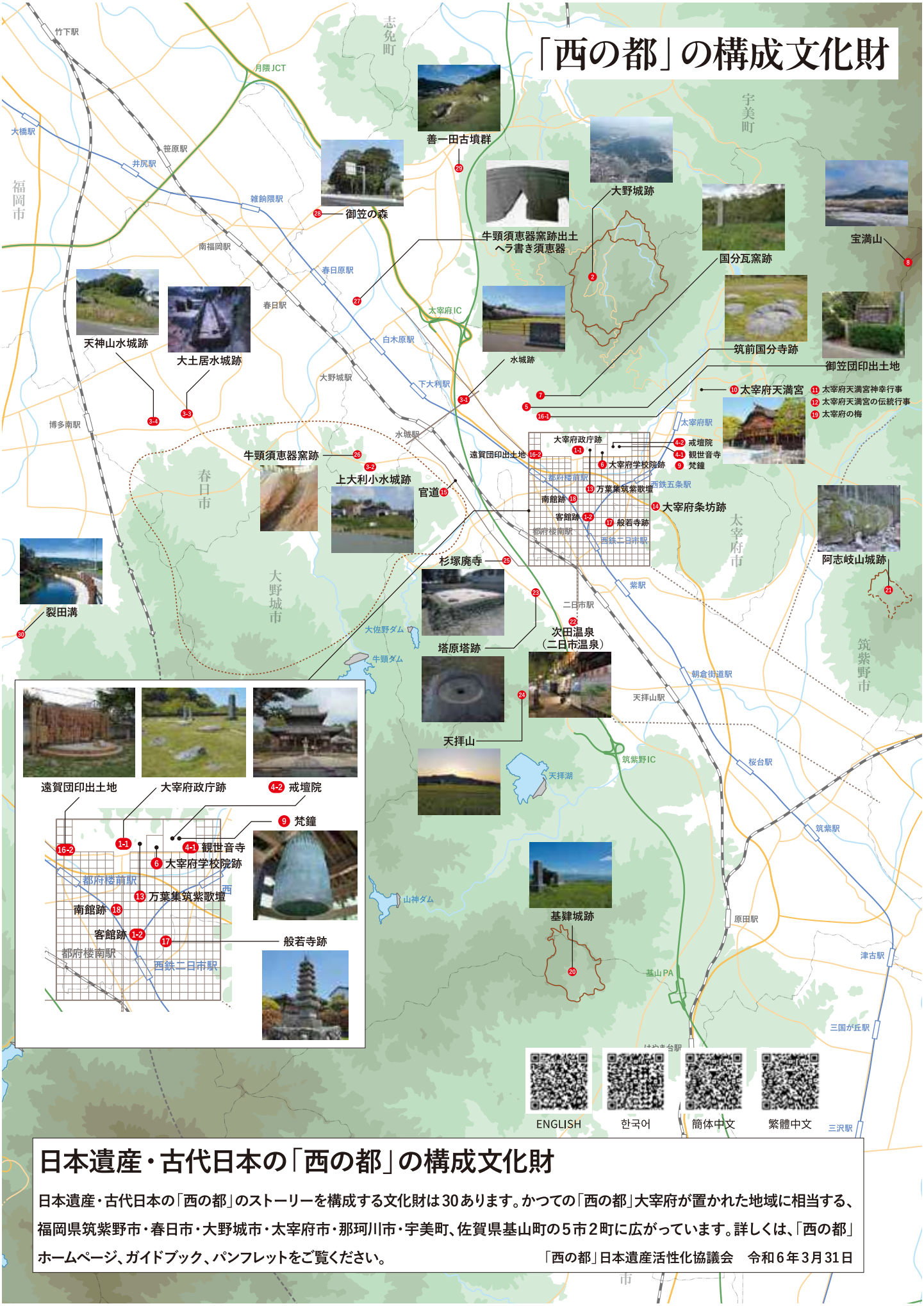
西の都　検索

https://www.nishinomiyako.com/

公式インスタグラム



「西の都」の構成文化財



日本遺産・古代日本の「西の都」の構成文化財

日本遺産・古代日本の「西の都」のストーリーを構成する文化財は30あります。かつての「西の都」大宰府が置かれた地域に相当する、福岡県筑紫野市・春日市・大野城市・太宰府市・那珂川市・宇美町、佐賀県基山町の5市2町に広がっています。詳しくは、「西の都」ホームページ、ガイドブック、パンフレットをご覧ください。

「西の都」日本遺産活性化協議会　令和6年3月31日

九州歴史資料館
KYUSHU HISTORICAL MUSEUM

日本遺産「古代日本の『西の都』」魅力発信事業
九州歴史資料館令和６年度古代史研究フォーラム
筑紫君磐井の乱の実像に迫る

編集・発行　九州歴史資料館
発行日　令和6年11月30日